

---

# ヒメミコ伝 古代の魔神

神村律子

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ヒメミコ伝 古代の魔神

### 【Nコード】

N7280E

### 【作者名】

神村律子

### 【あらすじ】

杉野森学園高等部の日本史の教師小野藍は古くから続く古神道の神社の巫女でもある。その家系故に九州に秘められた巨大な力を巡り、闇の魔神を復活させようとする呪術者との戦いに発展して行く。そして戦いの場は九州から出雲へと拡大する。日本の古代史に興味のある方、ご一読下さい。

## 前日譚 藍と剣志郎 大学編

夏が過ぎ去り、秋が訪れようとしていた頃の話である。

杉野森学園高等部で同じクラスになって以来、りゅうじんけんしろう竜神剣志郎はある女子のことがずっと気になっていた。

彼が今まであったことがないタイプの女子だったのだ。

その女子の名は、小野藍。

はるか邪馬台国の時代から続く由緒ある神社の巫女もこなしていて、所謂才色兼備の女性だ。

中学三年生の時、両親を航空機の事故で失って祖父母に育てられた藍は、神社という環境もあったが、それ以上に厳格な祖父仁斎の影響もあり、非常に男性に対してガードが堅い。

というより、あまり男子に関心がないのかも知れない。

剣志郎は杉野森学園に在学していた当時もそれとなく藍にラブコールを送っていたのだが、鈍感なのか、トボケているのか、藍は一向に剣志郎の思いに答える様子がなかった。

そんなもやもやした気持ちで過ごしていたため、剣志郎は藍と同じ国立大学を受験したのだが、不合格となり、浪人生活を余儀なくされた。

それでも彼は、大学なら藍ももう少し男性に関心を持つようになるのではないかという淡い期待を糧に、何とか翌年、同じ大学に合格し、藍の後輩になることができた。

後輩にはなれたものの、一学年違うという現実は、思った以上に大きな壁となって剣志郎の前に立ちはだかった。

講義は全く別。

カリキュラムで重なるところはない。

唯一の接点は、サークル活動であったが、神社の仕事が忙しい藍は、部活動もサークル活動もせず、講義が終わるとそのまま家に帰

ってしまうので、剣志郎は同じ大学に通学していながら、藍の顔を見ることすら稀になってしまっていた。

そんなある週の金曜日。

最後の講義も終わり、剣志郎はいつものように大学の最寄りの駅に向かってトボトボと歩いていた。

友人達が合コンやデートに忙しい中、彼は置いてきぼりを食ったように一人で家路についていた。

藍以外恋愛の対象にしたことがない、あまりにも一途なこの男は、藍に会えない、いや、顔を見ることもできない日は、何もする気がなくなる程辛かった。

それなりの身長と顔立ちをしていて、他の女子には人気があるようなのだが、藍に一途なのを男友達共がばらしてしまうので、その気配すら感じないうちに、女子達は剣志郎から離れてしまっていたのだ。

女子達は藍には勝てないと思う程、藍は男子に人気があったのだ。だからと言って、剣志郎はそのことを悔しがったりもしない。

端から見ていると、気の毒な程だった。

だから知らない者からは、剣志郎は全くモテない男に見えたはずだ。現に藍は今でもそう思っているフシがある。

剣志郎は、交差点を左に曲がり、自分が住むアパートの方角に歩を進めた。その時、

「剣志郎」

と彼の後方で女性の声がした。

剣志郎はその声に耳を疑った。

4月の入学当初、何回か顔を合わせただけで、その後は夏休みに入るまでほとんど話をするどころか、顔すら見られなかった藍の声だったのだ。

「えっ？」

剣志郎はドキンとして振り返った。

空耳ではなかった。

そこには、間違いなく藍が立っていた。

ショートカットの髪、ちょっと吊り上がり気味の目、程よい高さの鼻、上品な大きさの唇。もう何年も会わなかったような気がする程、懐かしい顔だった。

もう少し服装に気を使えば、素材はいいのだから、ファッション雑誌の表紙を飾れるくらいの容姿なのに、彼女はいつも名前と同じ藍色のジーンズと、真っ白なＴシャツという、シンプルな出立ちなのだ。

肩にかけたバッグも、ブランドものではない。

もしかすると、百円均一の店で買ったものかも知れないのだ。

「今帰るところ？」

藍は、長い間顔を合わせていないことを感じさせない口調で、剣志郎に尋ねた。

剣志郎は呂律が回らないのではないかと思う程内心ドキドキしていたが、何とか冷静さを保って、

「ああ、そうだよ。珍しいな、こんなところで会うなんて」

と応じた。藍はニツコリとして、

「実はさ、私、アパートを借りて、一人暮らしを始めたんだ」

「えっ？」

剣志郎は藍の意外な話にキョトンとした。

（何？ どういうこと？ 何の話？）

剣志郎は一生懸命藍の意図を考えた。

だが、わからなかった。藍は続けた。

「今日はこれから何か予定あるの？」

さらに難問だ。これはどういう意味だ？ 俺は試されているのか

？ 剣志郎はますます混乱した。

「ないんだったら、買い物付き合ってよ。夕食ご馳走するから」

「ええっ？」

剣志郎は思わず大声を出してしまった。藍はその声の大きさにび

つくりして、

「ど、どうしたのよ？」

と訝しそうに剣志郎を見た。剣志郎は作り笑いをして、  
「い、いや、何でもないよ。そうか、一人暮らしを始めたのか……」  
と必死になって胸の高鳴りを抑えた。藍はまだ剣志郎の様子が変なのを不審に思っているようだったが、

「ダメかな？ 忙しい？」

「と、とんでもないよ。大丈夫さ。付き合っよ」

剣志郎は声を上擦らせて答えた。藍はまたニコツとして、

「そう。良かった。じゃ、行きましょ！」

と剣志郎の左手を掴むと、歩き出した。

剣志郎は藍に手を握られたのと、あまりに急激な展開に顔が真っ赤になってしまっていた。周囲を歩いている学生達も、二人の様子を見て何か囁き合っているように思えた。

（俺達って、どういう関係に見えているのかな？）

剣志郎はそんなことを想像して、ついニヤニヤしてしまった。

すれ違ったカップルがその顔を気持ち悪そうに見ていたのを、剣志郎は知らない。

「大丈夫？ 重くない？ 一つくらい持とうか？」

藍はレジ袋を5つも持つている剣志郎に尋ねた。

剣志郎は本当は指が千切れそうなくらい辛かったが、

「大丈夫だよ。剣道の防具の方がずっと重いよ」

と平静を装ってみせた。藍はクスツと笑って、

「そう。じゃ、あともう少しだから」

と前を歩いて行った。剣志郎は藍が前を向くと同時に、グターツというように肩を落とす、息も絶え絶えにレジ袋を支えて歩いた。

痩せ我慢もここまで来ると哀れを通り越して、滑稽である。

「奥さん美人だから、サービスしとくね」

鮮魚コーナーのおじさんが、人によつてはセクハラだと騒ぎかね

ない言葉をかけたのも、剣志郎にはドキドキものだった。

「違いますよ、私達夫婦じゃありませんから」

と真剣な顔で否定する藍を想像したのだが、彼女はそんなおじさんの冗談にただ微笑んだだけで何も言わなかったのだ。

（まさか藍は本当は俺のことを……）

剣志郎はそこまで考えて、何とか妄想を打ち消した。

そんなはずがない。

藍は俺が気を悪くすると思って、何も言わなかったただけだ。

あまり都合のいいように解釈するのは良くない。

剣志郎はそう考えて、レジ袋を持ち直した。

「そこだよ」

藍が指差したのは、控え目に言っても、藍のような若い女性が一  
人暮らしを始めるのに選ぶアパートではなかった。

築三十年は経っているだろう、木造建築である。

ヘタをすると、風呂なしかも知れない。

「一階の一番奥の部屋だから」

藍は進みながら言った。そしてバッグから鍵を取り出して、

「さっ、どうぞ」

とロックを解除してドアを開けた。剣志郎は、

「お邪魔します」

と言いながら、玄関に入った。

玄関のすぐ脇がキッチンになっている。

ガスコンロが一つの、シンプルな流し台がある。

その向こうが浴室だ。

取り敢えず、銭湯生活はしないでもいいようだ。

その反対側がトイレになっている。

ユニットバスではないところが、昔ながらのアパートである。

キッチンとの間に半開きのガラス戸があり、その奥に部屋があっ  
た。

広くても六畳くらいの畳敷きの部屋だ。

家賃はいくらくらいだろうか？ 壁は張り替えてあるらしく、汚れない。

床も張り替えたらしく、きれいだ。顔が写る程ではないが、キツチンの窓から斜めに射し込む西日で輝いている。

「何してるの、早く上がって」

「あ、ああ」

藍に促されて我に返った剣志郎は、靴を脱いで部屋に上がった。後ろを見ると、藍が自分の靴と剣志郎の靴を揃えている。

それも何故か剣志郎にはドキンとする仕草だった。

「ありがとう、そこに置いといて」

と藍は流し台の上を右手で示した。

「ああ」

剣志郎はそう応じて、レジ袋を流し台の上に置き、やっとまさに「肩の荷」を下ろした。

「そうだ、夕食にするまでまだ時間がかかるから、先にお風呂に入って」

藍の言葉に、剣志郎は心臓が飛び出すのではないかと言うくらい驚愕した。

「えっ？ 風呂？」

「そう。入らないの、お風呂？」

藍はキョトンとした顔で尋ね返した。剣志郎は妄想が暴走しそうだったが、

「いや、その、別に風呂は入らなくてもいいよ。できるまで待つてるよ」

と部屋に入ってテーブルの手前に腰を下ろした。すると藍は剣志郎の右隣に立って、

「何言ってるの！ ビールも冷えてるから、入っちゃいなさいよ。遠慮なんかしないでいいのよ」

「遠慮してるワケじゃないけどさ……」

剣志郎が動かないでいると、藍は奥の押し入れからタオルと着替



え用なのだろうか、作務衣を出して剣志郎に押しつけ、

「ほら、早く！ 私、これから忙しいんだから！」

「あ、ああ」

藍があまり熱心に勧めるので、剣志郎はその迫力に圧倒される形でとうとう風呂に入ることになった。

「出かける前にタイマー予約しておいたから、もう十分温かいはずよ。ゆっくり浸かってね」

「ああ」

さつきから同じことしか言っていない剣志郎は、すっかり藍のペースにハマっていた。

（これは、誘っているのか？）

剣志郎は禁断の地に踏み込んだ宣教師のような心境になっていた。（いや、藍はそんな軽い女じゃない。俺の思い過ごしだ）

剣志郎は風呂場に入りながら、葛藤していた。

「それにしても……」

浴室のドアは磨りガラスになっていて、中は脱衣所と浴槽のあるスペースに分けられている。

二つを隔てているのは、ホテルによくあるカーテンだ。

剣志郎は着衣を全て脱ぐと、カーテンを開けて、浴槽を見た。

ステンレス製の、大きめなものだ。

ピカピカという程ではないが、目立った傷もない。新しいものようだ。

「この浴槽に藍が……」

剣志郎は良からぬ想像を始めてしまった。ハッと我に返り、

「な、何考えてるんだ、俺は？」

と顔をブルブルと横に振って、妄想を断ち切り、蛇腹式の蓋をクルクルと丸めて開き、ピンクのポリの風呂桶で掛かり湯をすると、ゆっくりと湯船に身を沈めた。

「ハアーツ……」

彼は両手で顔を洗い、浴室の天井を見渡した。

壁も天井もきれいだ。

外から見たこのアパートのイメージと随分違う印象を受ける。

「そうか。外観は古臭いけど、中は新しいので、ここを選んだのかな？ でも、藍の自宅って、大学から徒歩で15分くらいのところだよな。わざわざアパートに引っ越すなんて・・・」

「やっぱり誘ってるのか？ 剣志郎はどうしてもそんな妄想をしてしまった。」

「まさか後から入って来て……」

「お背中流しましょうか、などという妄想は、時代劇の見過ぎである。」

「剣志郎は何とか妄想を頭から追い出し、髪を洗い、身体を洗った。長居をするとうどんどん妄想の虫が成長しそうなので、剣志郎は早々と風呂を上がった。」

「あら、もう出たの？ まだ支度できてないわよ」

「藍は部屋の隅に何かを置いていたのだが、剣志郎が出て来たので慌ててキッチンにやって来た。」

「何してたのさ？」

「藍の行動に疑問を持って、剣志郎は尋ねた。すると藍は苦笑いして、」

「別に何もしてないよ」

と答えた。剣志郎は部屋の四隅を見た。

そこには白い箱が置かれているだけで、何も変わった様子はなかった。

「そう」

彼はそれ以上追求することもせず、テーブルの前に腰を下ろした。改めて部屋を見回すと、若い女性の一人暮らしの割には、冷蔵庫とテーブルしかないという、何とも殺風景な雰囲気だ。

「冷蔵庫にビールが冷えてるから、それ飲んで。もうすぐ支度できるからさ」

藍は忙しく手を動かしながら言った。

剣志郎は立ち上がって、部屋にある小型の冷蔵庫に近づくと、中から缶ビールを一本取り出した。

彼がいつもコンビニで買っているのと同じ銘柄だ。

（あいつ、俺がこれしか飲まないの、知ってるのかな？）

剣志郎は不思議に思いながらも、それを手にテーブルに戻った。

「冷凍室に、ジョッキを冷やしてあるから、それ使ってね」

藍は包丁で何かをきざみながら、振り返らずに言った。剣志郎は冷凍室のドアを開いた。

そこにはガラスのジョッキではなく、陶器のジョッキが入っていた。

「これ、備前焼じゃないか？ いいのか、こんな高そうなのを使つて？」

剣志郎はビビりながらそのジョッキを取り出して藍に尋ねた。

少し霜が降りたように白くなっているそれは、心地よい冷たさだった。

「確かに備前焼だけど、高くないよ。貰い物だし」

「そ、そう」

少しだけホッとして、剣志郎はテーブルにジョッキを置いた。

そして、缶ビールのプルトップを起こし、口を開け、ジョッキにビールを注いだ。

備前焼のジョッキの本領発揮で、まるで生クリームのような細かい泡が立ち、ビールを覆い隠した。

「こいつはうまそうだな」

「そうだよ。いつものビールが、とっても美味くなるから」

藍がキッチンから大皿を二つ両手に持って現れた。

数種類の刺身と、唐揚げがそれぞれ載った皿である。

どちらも剣志郎が毎日食べても飽きないほどの好物である。

「小皿はあるわよね。醤油は自分で適当に入れてね」

「ああ」

キッチンに戻って行く藍の後ろ姿を見て、剣志郎は、ジョッキの

ビールをググツと飲んで、

（ 明るくて綺麗な妻の手料理を食べながらの晩酌。 いいなァ…… ）  
とまた妄想を膨らませた。

「はい、サラダね」

次は深皿に盛られたポテトサラダだった。

これも剣志郎の好物だ。

その隣に置かれたのは、フルーツの盛り合わせ。

林檎、蜜柑、葡萄、バナナ、パイナップル。どれも剣志郎が大好きなものだ。

「あのさ」

そんな豪勢なもてなしを受けていながらも、ふと疑問に思ふことがあった。

「何？」

藍はテーブルの反対側に正座して剣志郎を見た。 こんな至近距離で藍と向かい合って話するのは久しぶりである。

「変なこと聞くけど、どうして俺なんかを夕食に招待してくれたのさ？」

剣志郎はジョッキに残りのビールを注ぎながら尋ねた。 藍はニコツとして、

「別にいいじゃない、そんなこと。 剣志郎とは、長い付き合いだしさ、たまにはこういうのもいいでしょ？」

と言って、サッサと立ち上がり、キッチンに戻った。

剣志郎はますますわからなくなった。

（ どういう意味だ？ 只単に、俺とは長い付き合いだから、夕食に招待してくれただけなのか？ でもそれなら、風呂に入れとか言わないよな。 やっぱ、誘ってるのか？ ）

また良からぬ妄想モードが始まりかけた。

「ごめんね、忙しくて。 さっ、どうぞ」

藍は冷蔵庫から缶ビールを取り出し、剣志郎にお酌した。 剣志郎は赤らんだ顔をさらに赤くして、

「あ、悪い」

と言いながらも、藍のお酌に内心ワクワクしていた。藍は缶をテーブルに置いて、

「私も少し頂いちゃおうかな」

と言って、別の缶を冷蔵庫から取り出した。剣志郎は慌てて藍から缶を取り上げ、

「冷凍庫にもう一つジョッキあったよな。俺が注ぐよ」

「わかった」

藍は立ち上がって冷凍庫からジョッキを持って来た。

「はい」

「おう」

藍のジョッキはガラスだったが、剣志郎がビールを程良い速さで注いだので、見事な泡が立ち、ビールを覆った。

「注ぐのうまいね、剣志郎」

と藍は言い、

「乾杯！」

「乾杯！」

二人は微笑み合ってグラスを合わせ、グツとビールを飲んだ。

「まだビールがうまい季節なんだね」

藍はジョッキのビールを飲み干して言った。剣志郎はそれを見てビクリし、

「お前、酒強いのか？」

「強いつて程じゃないけど、お猪口一杯で悪酔いする程下戸じゃないわね」

「そ、そうか……」

それなら藍にいくらビールを勧めても、酔い潰して妙なことをしようと思んでいるとは思われないな、と剣志郎は心の中でホッとした。

しばらく二人は久しぶりに話をしたのも手伝って、杉野森学園高等部の頃の話や、今受けている講義の話、インパクトのある教授の

話、キャラの濃い友人の話などをして、大いに盛り上がった。

「それにしても、久しぶりだったよな。全然キャンパスで顔会わせない日も多かったもんな」

酔いが回り始めた剣志郎が、呂律が回らなくなった口調で言った。藍は笑いながら、

「そうだね。杉野森学園の頃に比べると、会わない日が多くなったよね。だから、こんな形で一緒に御飯食べるのもいいかなって思ってたんだよ」

すると剣志郎は、酒のせいもあってか、普段なら決して言えないようなことを言い出した。

「でもさ、このシチュエーションでさ、どう考えても、藍が実は俺に気があって、誘っているとしたか思えないんだよね」  
「えっ？」

藍はさすがにその言葉にはギクツとしたようだ。剣志郎はトロンとした目で藍を見て、

「本当は俺のことが好きなんだろ、藍？ 白状しろよ」

と尋ねた。藍は剣志郎が悪酔いしているのだと考え、

「何バカなこと言ってるのよ。随分酔って来たわね。もう寝る？」

「寝る？ 何言ってるんだよ。俺とお前は恋人同士じゃないんだから、一緒に寝るなんてできないよ。俺は帰ります」

剣志郎はそう宣言するとスツと立ち上がり、玄関に向かってフラフラしながら歩き出した。

「危ないわよ、剣志郎」

藍は慌ててふらつく剣志郎の右腕を掴んで引き止めた。

剣志郎は二ヘラーツと嫌らしい笑みを浮かべて、

「何だよ、藍、俺に帰って欲しくないのか？」

剣志郎は完全にいつもの彼ではなくなっていた。

「飲ませ過ぎたかな……」

藍はそう呟くと、

「お布団敷くから、ちょっとこっちにいてね」

とキッチンに連れ出し、座らせた。

剣志郎は何かブツブツと呟いていたが、藍はそれには応じずに部屋に戻り、テーブルをキッチンに移動し、押し入れの中から布団を出して敷いた。

「この位置で大丈夫かな？」

藍は部屋の四隅の白い箱を見渡し、布団を少しずらした。

「さア、用意できたわよ、剣志郎」

と藍が声をかけると、剣志郎はキッチンの床に顔を押しつけるようにして眠っていた。

「もう、仕方ないなア」

藍は剣志郎を引き摺り、布団に寝かせた。そして、

「酔っている時に変なこと言わないでよ」  
とムツとした顔で呟いた。

「あれ？」

どれほど時間が経ったのかわからないが、剣志郎は布団の中で目を覚ました。

部屋の中は真っ暗で、何も見えなかった。

「どこだ、ここ？」

しばらく思索して、ここが藍のアパートの部屋だと思い出した剣志郎は、仰天した。

「お、俺、泊まっちゃったのか、藍の部屋に？」

しかし部屋の中を見回しても、藍はどこにもいない。

「怒って出て行っちゃったのかな？」

とにかく藍を探して謝ろうと考えた彼は、起き上がろうとした。その瞬間、まるで木が裂けるような鋭い音が鳴り響いた。

剣志郎は仰天して布団から這い出ようとしたが、手も足も痺れたように動かなくなっていた。

動かせるのは、首から上だけである。

「まさか、これ、金縛り？」

全身に嫌な汗が出て来た。

寝ぼけていた頭がすっかり覚め、周囲に何かいないか目と首だけで探した。

すると、足下の方に白いものが見えた。

「何？」

剣志郎は寒気がした。明らかに人間ではない。

もちろん、動物でもない。では一体何だ？

「もしかして……」

剣志郎はビクビクしながら目を凝らして、その白いものを見た。

その白いものは、始めはボンヤリとしていたのだが、次第に輪郭がハッキリして来た。

それは、若い女のようなだった。

髪が長い。そして酷く痩せている。顔色は無いに等しい程白い。

いや、全体的に白い感じだ。どう見ても藍が変装しているのではない。

その上、足は見えない。宙に浮いているような状態である。

女はスーッと顔を剣志郎の方に向けた。その目は瞳がなく、只白かった。

明らかに生きている女ではない。

「ま、まさか……」

幽霊？ 俺には靈感なんてないはずだ。どうして見えるんだ？

剣志郎は混乱していた。

「見つからないの……。見つからないの……」

その女の霊は、頭のとっぺんからだすような高い声で言った。

「な、何が？」

剣志郎は女の霊に恐る恐る尋ねた。すると女の霊は剣志郎にスーッと近づき、

「指輪。私の大切な指輪。どこにもないの。だから一緒に探して」  
剣志郎はギョツとして、

「し、知らない。そんなもの知らない！ 一人で探してくれ！」



「一緒に探してエッ！」

穏やかだった女の形相が一変し、周囲に得体の知れない黒い塊を伴って、剣志郎に襲いかかって来た。ところが剣志郎の寝ている布団の上まで来た時、女の霊は何かに弾かれたように、

「ギャッ！」

と叫んで後退した。と同時に玄関のドアが開き、藍が飛び込んで来た。

「やっとお出ましね、今日のメインゲストが」

「メインゲスト？」

剣志郎は藍の言葉に応じて、女の霊を見た。女の霊は憎しみの目で藍を睨んだ。

「お前が、お前が指輪を隠したのか!？」

女はそう叫ぶと、藍に突進した。藍は部屋の隅に走ると、白い箱を退けた。白い箱は紐で繋がれていて、四つの箱が同時に隅から動かされた。

「ギャーッ！」

女の霊が叫んだ。

部屋の四隅にあった白い箱の下には、清めた塩が盛ってあった。箱を退けることによって、盛り塩の結界が完成し、女の霊はその中に閉じ込められてしまったのだ。

「貴女はもう肉体を失って、この世界から去らなければならないの。いつまでも指輪に妄執していたから、おかしなものに取り憑かれてしまったのよ」

女の霊から、黒い塊が次々に離れて消滅して行った。藍が柏手を二回打つと、剣志郎の金縛りが解け、あたりの重々しい空気がサッと軽くなった。

「あ、身体が動く……」

剣志郎はすっかり驚愕していた。藍はジーンパンのポケットから指輪を取り出し、

「ほら、貴女の探していたものは私が見つけたわ。もう探さなくて

いいのよ」

女の霊は悪いものが皆離れたおかげで、もとの穏やかな顔になり、姿も白一色から普通の色合いに戻った。よく見ると、藍とは違う種類の、大人しそうな美人である。

「指輪……。私の指輪……」

女の霊は藍に近づいた。藍は指輪を差し出し、女の霊に渡した。

「ありがとう。ありがとう……」

女の霊は何度も礼を言い、消えて行った。

それと同時に、指輪がコロンと畳の上に落ちた。藍はそれを拾い上げて、

「浄霊完了ね」

と呟いた。そして、部屋の明かりを点灯した。

「何だっただ、一体？」

剣志郎はまだ呆然としていた。藍は指輪を眺めながら、

「あの人、恋人にプレゼントされた指輪をなくしてしまって、どうしても見つけ出せなくて、この部屋で睡眠薬を大量に吞んで自殺した人なの」

「どうしてそんなことで死んでしまったんだ？ 指輪なんて、また買えばいいじゃないか」

と剣志郎が起き上がって言うと、藍は剣志郎を見て、

「そうよね。そんなことくらいで死ななくてもいいはずよ。じゃあ、どうして彼女は自殺までしてしまったのかと言うと、この指輪に理由があったのよ」

と指輪を見せた。剣志郎はキョトンとして、

「えっ？ どういう意味？」

「この指輪は、恋人の母親が買ってくれたものなの。彼女ができたこれをプレゼントしなさいってね。母一人子一人で暮らして来て、苦労ばかりして来た母親の姿を見て育ったから、その恋人は母親の思いの深さに感動したの。ところがその母親は、それからしばらくして亡くなってしまったわ。病気でね」

藍の話に、剣志郎はしんみりとして、

「そうか。買い替えのきくものじゃなかったんだな。だから思い詰めてしまつて……。悲しいな」

藍は剣志郎の言葉にゆつくりと頷き、

「ええ。しかも、なくしたのは、その母親が入院した当日。3ヶ月後に母親は亡くなって、葬儀の段取りとか進めて行くうちに、恋人に指輪をしていないことを気づかれたの。最初は誤摩化していたのだけれど、あれはお袋の形見と同じだから、葬式には必ずして来てくれて言われて、追い込まれてしまったのよ。それまで懸命に探してどうしても見つからなかったのに、あと何日かで見つけられるはずがない。彼女は仕方なく、恋人に全て打ち明けたわ。恋人は、母親を亡くしたショックも手伝つて、いつもなら絶対に言わないような言葉で彼女を非難したの。その上、このままじゃお袋が浮かばれない、どんなことがあつても探し出せて、彼女に詰め寄つたの。最愛の人に罵られて、精神的にかなり参つてしまった彼女は、とうとう自殺を思い立った。死んでお詫びをするしかない、考えてしまったのね」

「……」

剣志郎は、あまりに悲しい女の最期を知り、絶句してしまつた。

藍は指輪を握りしめて、

「彼女が自殺した日が、恋人の母親の葬儀の朝だったの。さすがにその恋人も、彼女の遺した遺書から自殺の原因が指輪にあることを知り、驚愕したらしいわ。いくら謝つても取り返しがつかないことを言つてしまったと感じた彼は、母親に続いて恋人まで失つたショックで、後を追おうと考えたの」

「そんな。そいつも死んでしまったのか？」

剣志郎はビクビクして尋ねた。すると藍は首を横に振つて、

「彼は生きているわ。でも、それは死ぬより辛いことがわかったからなの」

「どういうことだ？」

剣志郎は藍をジッと見て言った。藍は握っていた手を開いて指輪を見、

「彼は自殺をしようと思って、洗面所に行き、剃刀で手首を切ろうと考えたの。剃刀の入れてある引き出しを開いて、彼はそこに丸められたティッシュペーパーを見つけたわ。その時彼は雷に打たれたような衝撃を受けたの」

「何があつたのさ？」

剣志郎はさらに尋ねた。藍は剣志郎を見て、

「彼は思い出したのよ。母親が倒れた日のことを。彼女と母親と自分で夕食をとった日のことをね。食事は和やかに進んで、彼女はそのまま泊まることになったの。そして、彼女はお風呂に入った。その時、彼がほんのちよつとした悪戯心で、洗面台の上に置かれていた、彼女にプレゼントした指輪をティッシュペーパーに包んで、引き出しに隠したの」

「まさか……」

剣志郎はその偶然が引き起こしたその後のことを思い出し、胸が痛くなった。

「彼女が入浴していた時、母親が倒れたわ。彼女は恋人の叫び声に、すぐにお風呂から出て、指輪も何も忘れてすぐに服を着て、浴室を飛び出した。そのまま母親は入院し、彼も彼女も指輪のことを忘れてしまっていたの」

「何て残酷な偶然なんだよ。誰も悪くないじゃないか。誰のせいでもないじゃないか……」

剣志郎は目頭を抑えて言った。

「彼は自分がした悪戯で恋人を死に追いやってしまったことを知ったわ。彼には何の悪意もなかったけれど、結果として恋人は自殺してしまった。それだけは否定できない事実だったわ」

剣志郎は目を上げて藍を見た。藍も目を赤くしていた。

「何よりも彼が自分自身を許せなかったのは、指輪を隠したことを思い出すことなく、恋人を罵ってしまったこと、そして母親が浮か

ばれないと言いながら、実は自分が一番母親を悲しませるようなことをしていたのだということ」

藍はまた指輪を見つめて、

「この指輪は、その恋人から預かったもののなの。このアパートに自殺した彼女の霊が出るって聞いて、ここの大家さんを介して、私の家に依頼があつたのよ。何とか浄霊してくれないかって」

「そうだったのか……」

剣志郎はすっかり重い気持ちになっていたが、ハッとあることに思い至った。

「今の話だと、藍はこの部屋に幽霊が出ることを知っていたんだよね？」

剣志郎の質問に、藍はギクツとした。剣志郎は立ち上がって藍に詰め寄り、

「俺を夕食に誘つたのは、そのことを知っていて、なんだよな？」

どういふことなのか、説明してくれないか、小野藍さん？」

と言いつつ。藍は後ずさりして、

「この部屋は何人かの人が借りていて、そのうち何回か、女の幽霊が出ると言つて引越した人がいたの。それで、私がここに寝泊まりしたんだけど、全然出て来なくて。何故なんだろうと思って、幽霊を見た人を調べたら、男の人だけだったのがわかつたの」

と苦笑いしながら説明した。剣志郎は腕組みして、

「それで、何の事情も説明しないで、俺を呼んで、酔い潰してここに寝させたつてわけか」

「ちよつと違うけど、大体そんな感じね」

藍は苦笑いをしたままだ。剣志郎はムツとして、

「あのなア、もしかしたら、俺は取り殺されていたかも知れないんだぞ。どうして何も教えてくれなかつたんだよ！」

「教えたら絶対来てくれなかつたでしょ、剣志郎は」

と藍は反論した。剣志郎は少しだけ怯んだが、

「そ、そうかも知れないけど、どっちにしたつて酷いじゃないか。」

殺されるとこだったんだぞ」

と言い返した。すると藍は、

「それは絶対じゃないわ。彼女は指輪と一緒に探してくれる男性を求めていただけだから、あのまま私がここに来なくても、貴方が殺されることはなかったわ。ただ、ずっと一緒に指輪を探し続けなければならなかったでしょうけど。それに、貴方がかけていた布団にはお清めした注連縄が縫い込んであったから、彼女は貴方に近づくことはできなかったはずよ」

とさらに反論した。剣志郎は、女の霊が彼に近づこうとして何かに弾かれたように後退したのを思い出した。

「人は不幸な死に方をすると、記憶の大半を失ってしまうらしいの。だから彼女は、断片的に残っている記憶で、指輪と恋人を結びつけて、ここに引越して来た男性に自分の恋人を重ね合わせて、一緒に探してもらおうとしていたのよ。そんな彼女の一途な思いが、霊界に行けない一因になって、悪い霊に利用されてしまったのね。だから、取り殺すなんて、あり得ないわ」

藍の言葉に、剣志郎はまたシユンとして、

「あの女の人に悪いこと言っちゃったな。一人で探してくれ、なんてさ」

と呟くように言った。すると藍は軽蔑の眼差しで、

「ふーん、剣志郎って、美人には優しいのねエ」

「な、何だよ、そんな関係ないだろ？　彼女が可哀想だったからさ。それだけだよ」

剣志郎はほんの少しだけ凶星だったので、赤面して言い訳した。そして、

「彼女は大丈夫なのか？　記憶喪失のままなんだろう？」

「心配いらないわよ、優しい竜神剣志郎さん。彼女は指輪が見つかったのを知って、記憶を取り戻したはず。だからもう何も迷うことはないわ」

「そ、そうか」

剣志郎は藍に冷やかされたので膨れっ面をしながらも、悲しい女の霊がどうやら救われたらしいことを知って、ホッとした。

「さてと。まだ夜中の二時を過ぎたばかりだから、もう一眠りしようかな」

と藍は玄関に向かった。剣志郎はピクンとして、

「お、おい、どこに行くんだよ？」

藍は振り返り、

「隣の部屋。私、二部屋借りたのよ。さっきもそこで待機していたの。ほとんど寝ていないから、眠いのよ。お休み」

と言うとまた背を向けたので、剣志郎は、

「ちよつ、ちよつと待ってくれ。あんなことがあった直後に、この部屋に一人にしないでくれよ」

と泣き出しそうな顔で言った。藍は呆れ顔で、

「いい大人が何言ってるのよ。そんなにここが怖いのか？」

「こ、怖くはないけど、何となくその、えーと……」

剣志郎は顔を赤くして懸命に言い訳をしようとしたが、言葉が思い浮かばなかった。藍は仕方なさそうに、

「じゃあ、隣の部屋で寝る？」

「えっ？」

剣志郎は思ってもいなかった藍の答えにビックリした。彼は、できれば夜通しここで藍と話していたかっただけなのだ。

「いいのか？」

剣志郎は真つ赤になって尋ねた。藍は肩を竦めて、

「いいも何も、そうするしかないでしょ」

「そ、そうか」

と剣志郎は布団をまとめて持ち上げようとした。すると藍が、

「布団は隣の部屋にも敷いてあるわよ。持って行かなくても大丈夫」

「えっ？」

剣志郎は鼻血が出そうだった。心臓が肋骨を破って出て来そうなくらいドキドキと鳴った。

「じゃ、お言葉に甘えて……」

と剣志郎は玄関に向かった。すると藍が、

「はい、これ隣の部屋の鍵」

「へっ？」

剣志郎はキョトンとして鍵を受け取った。藍は剣志郎を送り出しながら、

「布団は敷いただけで私使ってないから。じゃ、お休み」

「えっ？」

藍はドアを閉じると、ガチャツとロックをし、部屋に行ってしまったようだ。

剣志郎は自分のオツチヨコチヨイ加減に落ち込んでしまった。

藍は部屋を替わろうと言っていたのだ。

それを自分は変な妄想を働かせて、一緒に寝るつもりになっていた。

恥ずかしさで死にたいくらいだった。

「はア……」

剣志郎は深い溜息を吐いた。

「俺って、本当にバカだな……」

彼は隣の部屋の前で鍵を開けながら、そう呟いた。

「藍は今頃、俺が寝ていた布団で……」

バカな男の妄想は、全く反省がなかった。



前日譚 藍と剣志郎 大学編（後書き）

しんみりしたかと思うと、ついおバカな展開にしてしまうのが、私の表現力の限界を如実に表しているような気がしてしまいます。剣志郎が藍との関係を進められない遠因が、この事件にあるというのが、今回のテーマです。

## 第一章

### 杉野森学園高等部（前書き）

このお話は、永久保貴さんの「カルラ舞う」に触発されて考えたお話で、かなり系統的に似たものになっておりますが、永久保ファンの方、怒らないで下さいね。

## 第一章 杉野森学園高等部

梅雨と書いて「つゆ」と読む。何故そう読むのかと日本語を勉強している外国の人に尋ねられても、答えようがない。昔からそう読むのだと言っしかない。

世田谷区の中心部を走る私鉄の駅に、「杉野森学園前駅」がある。都心から少し離れた、まさに閑静な環境にある、幼稚園から大学までのマンモス学校に一番近い駅である。

ついでに言えば、この私鉄も同じグループの会社で、駅周辺にあるたくさんの住宅も同系の建設会社の建てたものだ。要するに杉野森学園を取り巻く環境は、皆同じグループの手によるものなのだ。

この学園の高等部に勤めている日本史担当の女性教諭がこの話の主人公だ。

名前は、おのあゐ小野藍。

今年三年目の、やる気満々の熱血先生である。ショートカットの髪の上、少し顔がボーイッシュなので、時々駅のトイレなどで痴漢と間違われることもあるし、どちらかというと、男子より女子に人気がある先生だ。自分でもそのことを自覚しているのか、元々そうなのか、スカートは絶対履かない主義である。

「先生、おはようございます！」

女子生徒達が同時に頭を下げて挨拶した。藍は愛車の400ccのオートバイから降りてヘルメットを脱ぎ、ライダースーツの襟を正して、

「おはようございます」

と笑顔で答えた。彼女がスカートを履かないのは、とんでもないバイク好きが一因のようだ。どこへ行くにもバイクで行くほど好きな

のだ。藍はヘルメットを小脇に抱え、背中のバッグを背負い直すと、玄関に向かつて歩き始めた。ライダースーツでよくわからないが、スタイルはよさそうである。

「先生！」

二階の教室の窓から、目のクリツとした、真つ白なヘアバンドがよく似合う、お下げ髪的女子生徒が声をかけた。藍はその子を見上げて、

「どうしたの、古田さん？」

と尋ねた。古田と呼ばれた子は、

「文化祭で行う、研究発表のことなんですけど……」

「週末に、一泊二日で九州に行くって話ね？」

「はい、そうです」

「だめです」

藍はそう言い切ると、スタスタと玄関に入って行った。古田は少しムツとして教室を飛び出し、階段を駆け下りて職員室に向かう藍を追いかけた。

「待って下さい、先生。どうしてだめなんですか？」

古田は藍の前に立ちはだかって尋ねた。藍は呆れ気味に古田を見て、

「当たり前でしょ。高校生が、しかも男女一緒に一泊旅行だなんて許可できるわけないでしょ？」

「先生、古いです、考えが。今時男女で一泊旅行なんて、中学生だつてしてますよ」

「中学生がしていようと、小学生がしていようと、そんなことは関係ありません。だめです」

と言い、職員室に入って行ってしまった。古田は、

「いーだっ！」

と捨て台詞を吐き、教室へ戻って行った。その時、始業のチャイムが鳴り始めた。

「どうだった、由加？」

古田の隣の席に座っているオカッパ頭の女の子が尋ねた。水野祐子という、古田、いや、由加と同じ、歴史研究部に所属する、アイスクリームとハンバーガーが大好きな、ちよつと太めの女の子である。

「どうもこうもないわ。話にも何もならないのよ」

由加はふてくされた顔で席に着いた。祐子はニヤツとして、

「藍先生、神社の巫女さんだからなア。そりゃねお堅いわよねエ」

「きつと男と付き合ったことなんてないし、未だに処女なのよ」

と由加は強烈な悪口を言った。祐子はケラケラ笑って、

「そりゃそうよ。巫女さんは神様に仕えているのよ。だから処女じゃないと」

と言った。由加もケラケラ笑った。その時日直が、

「起立！」

と号令をかけた。由加と祐子はハツとして立ち上がった。

一方藍は、ライダースーツからチャコールグレーのツープースに着替え、次の授業の資料を作っていた。

「何やってんだ、藍？」

と藍の作業を覗き込んだ長身の若い男の教師が言った。彼の名は竜神剣志郎<sup>うしんけんしろう</sup>。藍とは高校以来（二人共杉野森学園高等部卒で、大学は某国立大である）のくされ縁で、就職先まで一緒になってしまった、妙な仲である。彼は剣道部の顧問であり、藍と同じく日本史の教師である。

杉野森学園高等部は、一学年10クラスあるが、そのうち5クラスが日本史を選択していた。藍が赴任するまで、日本史はこれほど人気はなかったのだ。それで、二人の日本史の教師が必要となり、竜神が二年前杉野森学園高等部に就職したのである。つまり、竜神は藍の後輩になる。彼は一浪して大学に入ったからだ。だから藍とは歳は同じだが、先輩後輩の仲である。

「何でもいいでしょ」

藍はムツとして剣志郎を見上げた。そして、

「それから、馴れ馴れしく藍なんて呼ばないでよ。誤解されるじゃない、他の先生方に」

と言うと、再び作業を始めた。剣志郎は肩を竦めて、

「この二ヶ月、そればかりだな。何をどう誤解されるっていうんだ？ 昨年度までは、何も言わなかったのにさ」

とあっけらかんとして言った。すると藍はまた剣志郎を見て、

「バカね！ 今年入った武光先生、知ってるでしょ？」

と声を低くして言った。剣志郎は周りを見回してから、

「ああ。それが何か？」

藍はますます声を低くして、

「武光先生、貴方を追ってこの学園に就職したって聞いたわよ」

「まさか」

剣志郎は笑って言った。そして、

「わかったよ。これからは気をつけますよ、藍大先生」

とニヤリとして言い、去って行った。藍は、

「もう！ バカ！」

と剣志郎の後ろ姿に向かって言った。

お昼休みになった。

高等部には收容人員五百名という、巨大な食堂がある。由加と彼女のクラスメート二人は、その一角で食事をしながら、話をしていた。

「文化祭でする研究発表、どうするのよ？ 私達、邪馬台国について発表するんでしょ？」

祐子が言った。由加はサンドイッチを一口齧って、

「うーん。邪馬台国があつた場所を探るには、どうしても九州に行かなくちゃならないんだけどねえ」

「先生に内緒で行っちゃおうよ」

と言ったのは江上波子という、ヒョロヒョロとした、長身のお下げ髪の子だ。大きな丸眼鏡が愛らしい子である。

「バツカね、そんなことして後でバレたら、停学になっちゃうわよ」

由加がたしなめると、波子はあつさりと、

「いいじゃない、停学になったって。学校を堂々と休めるよ」

「気楽な子だね、あんたは」

と祐子も呆れ気味である。由加は溜息を吐いて、

「まア、何にしてもあの堅物の処女先生を説得するのは難しいわね。脳味噌、明治時代なんじゃない？」

と言った時、祐子と波子がびつくりした顔で由加の後ろを見ていた。由加も背中に殺気のようなものを感じて、恐る恐る振り向いた。そこには、にこやかな顔をして藍が立っていた。

「ゲツ、先生……」

由加は冷や汗をドツとかいて立ち上がった。藍は由加の隣に座つて、

「ごめんなさいね、頭が明治時代で。でもね、処女と堅物は、関係ないと思うんだけど？」

「……………」

由加は返す言葉がなかった。藍はサンドイッチを一つつまんで、

「これいただくわね」

と頬張り、立ち上がって去って行った。

「あーっ、びつくりしたア」

と由加は椅子にドツカと座って言った。祐子もホッとして、

「にこやかに言われると、余計恐ろしいよね」

「ほーんと」

と波子は眼鏡をクイツと上げて同意した。

## 第二章 歴史研究部員の企み

放課後、藍は社会科教員室で一人で授業用の資料をコピーしていた。彼女が二枚目の資料のコピーを始めようとした時、ドアが開いた。

「あら？」

藍は声に反応して振り返った。そこにはまだ大学生のような雰囲気、気が抜け切らないスリーピースに、セミロングの巻き毛、パツチリした二重瞼の、可愛らしい女性が立っていた。

「あのオ、小野先生、竜神先生はどちらに？」

藍はニツコリして、

「剣志郎、いえ、竜神先生は、剣道場ですよ。練習試合が近いとか言っていましたから」

と答えた。尋ねた女性も微笑み返して、

「そうですか。ありがとうございます」

と言ってドアを閉めながら、

「小野先生って、竜神先生のこと、何でもご存じなんですね」

と捨て台詞のような言葉を残してドアを閉じた。藍はドアが閉じ切るとベーツと舌を出した。

「何よ、全く。誤解して」

社会科教員室のドアを閉じて剣道場に向かったのは、武光麻弥たけみつまみという、今年度赴任したばかりの、まだ女子大生みたいな英語の教師である。

彼女は大学時代から剣志郎のファンで、彼の出る試合は全て見に行き、バレンタインデーには毎年手作りチョコを送っていたほどだった。そのため、他にたくさんたの商社やメーカーの内定が出ていたにもかかわらず、杉野森学園高等部に就職したのであった。

「小野藍め、高校からの同級生なのをいいことに、私の剣志郎様を



たぶらかして．．．。絶対負けないわよ」

表ではおしとやかに振る舞い、裏では激しい気性を露にするという、結構二重人格の女性だ。

その性格が後で利用されることになるのだが．．．。

由加達は、歴史研究部の部室で、邪馬台国研究班を集めて話し合っていた。

「ねエ、何とか先生に気づかれずに、九州に行く方法ないかな？」と由加が一同を見渡して尋ねた。男子生徒の一人で、太り気味の子が、

「お前さ、さつきから九州、九州って騒いでるけど、いつから邪馬台国は九州にあつたって決まったんだよ？」

と口を挟んだ。由加はムツとして、

「何よ、田辺君。邪馬台国が大和にあつたっていうなら、貴方一人で奈良に行けばいいじゃないの」

と言い返した。田辺もムツとして、

「何だよ、その言い草は？」

「まアまア」

と間に入った男子生徒は、奥野正という、小柄で細身の男である。すると田辺は奥野を睨んで、

「お前の考えが一番調子がいいんだよ、奥野。九州にあつた邪馬台国が大和に移っただなんて」

「だってそれが一番全てをすつきりと説明できるじゃないか」

奥野は喧嘩を仲裁したのに自分に噛みついて来た田辺に力チンと来たらしく、興奮した口調で言い返した。

「邪馬台国が九州にあつて、その後東に移動して大和朝廷の元を築いたと考えると、天孫降臨が九州の高千穂峰にされたことや、神武天皇が東征したことがみんな説明がつくんだ」

奥野は立ち上がってまるで演説でもしているかのように語った。すると田辺はフンと鼻で笑って、

「それはお前が自分の都合のいいように話を解釈しているからだよ。天孫降臨や神武東征なんて、後世の人間が頭の中で作り上げたもので、事実でも何でもないさ」

奥野はムツとして反論しようとした。その時由加が、

「とにかく！ 今は邪馬台国がどこにあったかじゃなくて、どうすれば先生に知られずに、一泊旅行に行けるのか、それを考えてよ」と話を遮った。祐子が、

「何かいい方法、思いつかない？」

と尋ねたのは、由加のことが好きで、興味もない歴史研究部に入り、卑弥呼が誰なのかも知らないのに、邪馬台国研究班に所属している、理数系が得意な、佐藤孝という、青白い秀才タイプの男である。度の強い眼鏡をかけ、ボサボサの髪の毛、野暮ったい男だ。

「か、簡単だよ。女子は女子同士で誰かの家に集まり、泊まり込みで研究発表の準備をするふりをする。男子も同じようにする。そして親には、先生と一緒に九州まで研究のために旅行に行くと言って出かけるのさ」

「何か、すぐバレない？」

とは波子。田辺も、

「単純だよ、それ。親だつてそんな手に引っかけられないって」

「そうねエ……」

と由加も同意した。佐藤は由加に否定されたのが相当ショックだったようで、ションボリしてしまった。

「何の相談してるの？」

と藍が突然ドアを開いて入って来た。一同はギョツとして藍を見た。藍は、

「ははア、また何か悪たくみしてたな？ 九州に密かに行くこうしてるんでしょ？」

とニヤニヤして尋ねた。由加はしかし、とぼけた顔をして、

「いいえ。そんなこと、企んでいませんよ」

「ほんとオ？」

藍は疑いの目を一同に向けた。そして近くにあった椅子に座り、「まア、何にしても、九州に行くことばかりが邪馬台国の秘密を探る方法じゃないわよ」

「だって、歴史は現場で実感して初めて自分のものになるって言ったの、先生ですよ」

と由加は膨れっ面をして反論した。藍は由加を見て、

「それは最終的な段階のことよ。貴女達は邪馬台国の何を知っているの？」

「え．．．．．？」

由加はギクツとした。祐子と波子は思わず顔を見合わせた。藍は容赦しなかった。

「ねエ、古田さん、邪馬台国の人々の服装は、どんなだった？」

「え、あの、その．．．．．」

由加は冷や汗をかいていた。藍は次に田辺を見て、

「田辺君、邪馬台国畿内説を唱えている学者は、何を根拠にその説を支持しているの？」

「それは、ええと．．．．．」

田辺も動揺してしまい、何も答えられない。藍はさらに祐子に、

「水野さん、新井白石は、邪馬台国についてどういう考えを持っていた？」

「えっ、新井白石、ですか？」

「そうよ」

祐子は首を傾げたまま、何も答えられない。藍は立ち上がって、「まだ高校生になってから、日本史を勉強していない二年生の貴女達には、その程度の知識がなくても仕方ないけどね。でも、そんなことも知らずに九州に行つて、どうするつもりだったの？」

と一同を見回した。由加達は何も言えず、下を向いてしまった。藍は呆れ顔になり、

「行く前にもつと邪馬台国について調べてからの方がいいんじゃない？　一泊旅行がいいか悪いかは別にしてね」

と言うと、部室を出て行った。由加達は顔を見合わせて、深い溜息を吐いた。

杉野森学園高等部の校風は「文武両道」である。

だから、剣道と柔道は必修科目だ。どちらかを二年間、選択しなければならぬ。

竜神剣志郎は、三代続く剣道一家に生まれ育ち、その腕は全国大会にも出場したレベルだ。彼が杉野森学園高等部に就職できたのは、学園が日本史の先生がほしかったことと、剣道部の顧問がほしかったことがあった。もちろん、藍が推薦してくれたことも大きい。だから剣志郎は藍に頭が上がらない。ただ、藍はそのことを一度たりとも剣志郎に言ったことはないが。

「よし、それまで」

剣道場に剣志郎のよく通る声が響いた。部員達は打ち込みの練習をやめ、休憩に入った。そこへ麻弥が現れた。

「竜神先生！」

「あつ、武光先生」

部員達が冷やかすのを無視して、剣志郎は麻弥に近づいた。

「何ですか、武光先生？」

麻弥は剣志郎の顔を眩しそうに見て、

「今夜空いてらっしゃいますか？」

「はい？」

剣志郎は麻弥の消え入りそうな声が聞き取れず、尋ねた。麻弥は赤くなつて俯き、

「今夜お食事一緒にいかがですか？」

「えっ？ 夕飯ですか？」

剣志郎はアツケラカンとして大声で言った。部員達がその声を聞きつけ、二人に近づいた。麻弥はそれに気づくと、

「ま、また後で……」

と言うなり、走り去ってしまった。剣志郎は麻弥の後ろ姿を見なが

ら、  
「何だよ、全く……」  
と呟いた。

闇。

一切の光が差し込まない闇の中に、白装束を身にまとった、長髪を後ろで束ね、前髪を右眼が隠れるほど長く伸ばした長身の男がいた。

「時は熟した。依り代も見つけた。今をおいて、他にない……」

「  
はそう呟き、ニヤリとした。

「そうだ！ いい方法がある」

と由加が突然叫んだ。他の部員はびつくりして由加を見た。由加はニヤツとして、

「竜神先生をおだてて、一緒に行かせるのよ。そうすれば小野先生も文句言えないし、親達も納得するわよ」

「あの剣道バカを？ できるのか？」

とは田辺。由加はウインクして、

「そりゃもう、この私の魅力でね」

田辺は呆れたが、佐藤は大きく頷いた。祐子が、

「ついでに旅費も少し出してもらおうよ。九州まで行くってなると、私お年玉全部とってあるけど、それでも足りないよ」

「バイトしろよ、全く」

奥野が言った。祐子はムツとして奥野を見た。すると波子が、

「切符の手配は私に任せて。JRに私の伯父さんがいるから、安く手に入るよ。それにホテルも一緒に頼んじやえば、もっとお得だよ」

「それいいね。浮いたお金で夜遊びしよう」

祐子は急に機嫌を直して言った。今度は由加が呆れて、

「何考えてんのよ、あんたは」

と言った。そして、

「とにかく、竜神先生を落として来るから、ここで待ってて」と彼女は部室を飛び出して行った。

剣志郎が社会科教員室に戻ると、藍が一人で資料のコピーを整理していた。

「あれ、藍一人？ 他の先生は？」

剣志郎は中に入りながら尋ねた。藍は資料のコピーを机の引き出しに片づけると、

「帰ったわよ。私ももう帰るところ。また雨が降り出しそうだから」と立ち上がった。剣志郎は肩を竦めて、

「梅雨時くらい、バイクやめれば？ 毎日天気の心配してなくちゃならないだろ」

「別に私が濡れるのは構わないんだけど、洗濯物が濡れるのは困るのよ」

と藍が言うと、剣志郎は意外そうな顔をして、

「へえ。お前もたまには自分で洗濯物を取り込んだりするんだ？」

「うるさいな。今日はお祖父ちゃんが出かけているのよ」

藍はキツとして剣志郎を睨みつけた。剣志郎は笑って、

「なるほど。なら納得」

「フンだ！」

藍は剣志郎から顔を背けてドアに近づくと、

「お先に失礼します！」

と言い、ピシヤンと閉めた。剣志郎は溜息を吐いた。

「俺も素直じゃないんだよなア」

彼は自分の机に近づき、腰を下ろした。

藍は更衣室でライダースーツに着替え、玄関に向かった。その時彼女は由加が走って来るのを見かけた。

「先生、さようなら」

「さようなら．．．．」

藍は由加があらぬ方向　社会科教員室に向かっているのに気づき、足を止めた。

「何の用かしら？」

藍が由加を追おうとした時、

「小野先生！」

と麻弥が後ろから声をかけた。藍はビクツとして振り返った。麻弥はニツコリして、

「お帰りですか？」

「え、ええ、まア．．．．」

藍は、どうもこのお嬢様苦手だなアと思いながら、ニツコリした。

「お疲れ様でした」

「お疲れ様でした」

藍は立ち去る麻弥を見て、

「何か、出鼻くじかれちゃたなア」

と呟き、玄関を出た。

「失礼しまーす」

由加は実に豊かな笑みを顔いっぱいには浮かべて、社会科教員室に入った。

「小野先生はさつき帰ったぞ」

と剣志郎はチラツと机から目を上げて言った。すると由加は、

「いいえ、小野先生には用はないんです。私、竜神先生に用があつて来ました」

と言った。剣志郎は由加の方を向いて、

「何だ？」

由加はササツと剣志郎に近づき、

「実はア、私達歴史研究部ではア、今度の土日の連休を利用して、九州まで邪馬台国研究旅行に行こうと計画しているんですウ」

「九州？ そりゃまた、豪勢なことデ」

剣志郎は呆れ気味に言った。由加は揉み手をしながら、

「つきましては、私達だけでは許可されないし、心細いので、先生と一緒に行って頂けると非常にありがたいんですけどオ．．．」

「何イ？」

剣志郎はびつくりして立ち上がった。由加はニツコリして、

「いかがでしょうか？」

と小首を傾げて尋ねた。精一杯色気を出しているつもりらしい。しかし、剣志郎から見れば、１７歳のガキにしか見えない。彼は、

「だーめだ。俺は給料日前で金がないんだ。一緒になんて行けないよ」

と言った。すると由加は目を潤ませて、

「だめなんですか？」

剣志郎もさすがに胸が痛む思いがしたが、先立つものがないのは、どうすることもできないと考え、

「ああ、だめだ」

と言い切った。すると、

「お金なら私が出しますわ」

と麻弥が入って来た。剣志郎と由加はびつくりして、

「ええっ？」

と同時に麻弥を見た。麻弥はニツコリして、

「せっかく古田さん達が研究のために旅行に行こうとしているのですから、それを助けてあげるのが、教師の役目ではないでしょうか？」

「あ、ありがとうございます、武光先生」

由加は戸惑いながらもお礼を言った。麻弥は由加に目を転じて、

「さア、もう帰りなさい。後は私が竜神先生と話し合いますから」

「は、はい．．．」

由加はまるで追い立てられるように教員室を出て行った。

「いいんですか、武光先生？ 金返すの、給料日過ぎですよ？」

と剣志郎が言うと、麻弥は剣志郎を見てまたニツコリし、



「いいんですよ、竜神先生。私、竜神先生と一緒に旅行できるなんて、夢のようですよ」

と言った。剣志郎はすっかり呆気にとられ、何も言えなかった。

（この子、自分も行くつもりなのかよ……………）

麻弥はさらに、

「そうそう。そろそろ帰りましょうか？」

「はア？」

剣志郎はキョトンとした。すると麻弥は、

「夕食、ご一緒に下さるんでしょう？」

「えっ？ ああ、そうでしたね。ハハハ……………」

剣志郎は頭を掻きながら応えた。

由加は部室に戻り、事の経緯を他の部員に話した。祐子はヒューツと口笛を吹いて、

「あの色気女、竜神先生に気があるから、そんなこと言い出したのよ、きっと」

「そうね。麻弥先生って、見た目は子供っぽいけど、結構遊んでるって感じだしね」

と波子は同意した。田辺は、

「何にしても、スポンサーになってくれるのならありがたいよ。確かあの先生の家、大金持ちだよな？ 成城のお嬢様なんだろう？」

「そうよ」

と由加。田辺はニヤリとして、

「ついでに俺達の旅費もみんな出してもらえないかな？」

「あんたもせこいこと考えるね、全く」

由加は呆れた。すると祐子が、

「それ、いい考えよ。それで浮いたお金で遊んじゃおうよ」

「またそれ？」

由加は頬杖をついて軽蔑の眼差しを祐子に向けた。



### 第三章 黄泉路古神道

藍はバイクで家に向かっていた。

藍の家は由加達の話の中に出て来たように、神社である。

藍は学校が休みの時は、巫女をやっている。もちろん学園側は了解済みだ。

彼女は中学三年生の時、両親を飛行機事故で亡くし、祖父母に育てられた。しかし祖母も一年前に他界し、今では祖父である仁斎と二人で暮らしている。その仁斎が神社の宮司である。

「あつ！」

彼女は忘れ物をしたことに気づき、バイクをUターンさせた。

「あら？」

一時停止をした時、藍は右側から走って来る白のセダンに気づいた。それは剣志郎の車だった。

「あれは……」

しかも剣志郎の隣には、ニコニコ笑っている麻弥の姿があった。

「何で武光先生が？」

藍は複雑な思いで、走り去るセダンを見送ると、学園に向かって右折した。

小野神社。

それが藍の家が代々護っている神社の名だ。平安時代の才人、小野篁のたかむらを始祖とし、天照大神と小野篁を祭神とする神社である。宗派名は「姫巫女流ひめみこりゅう」だ。藍はこの名が小さい頃から気に入っており、早く跡を継ぎたいと思っていたが、祖父仁斎は厳しく、当分譲ってもらえそうになかった。

「ひとふたみよ　いつむななやこのたり　ふるえ　ふるえ　ゆらゆらと　ふるえ」

藍の祖父仁斎は、神社奥の拝殿の裏にある、注連縄のついた大き

な石の前で、祈っていた。普段は非常ににこやかで、水戸黄門役でもできそうなほど柔和な雰囲気仁齋であるが、この時はとても険しい顔をしていた。

「バカな……。何故奴の気が感じられるのだ……。？ 奴は50年前、死んだはず……」

仁齋は眉間に皺を寄せて呟いた。すると、

「やっぱりここだったのね、お祖父ちゃん」

と藍がヘルメット片手に現れた。仁齋はパツと穏やかな顔になり、

「おお、藍、帰っていたのか」

「うん。お祖父ちゃんこそ早かったわね」

「ああ。思ったより早く仕事が終わったのでな」

仁齋はそう言つと、社務所に向かって歩き出した。藍がこれに続いた。

「どうしたの、お祖父ちゃん？ なにかあったの？」

「……」

仁齋は話すまいかどうか迷っているようだったが、戸に手をかけて開き、

「中に入れ、藍」

と社務所に入った。藍も中に入り、後ろ手に戸を閉めた。

「何？」

藍は丸椅子に腰を下ろし、ヘルメットをテーブルの上に置いて尋ねた。仁齋は立ったまま藍を見て、

「50年前に死んだはずの男が、生きている……。？」

「えっ？」

藍はキョトンとした。仁齋は鋭い眼で、

「奴は我が姫巫女流の邪流である黄泉路よみじしんどう古神道ひとしんどうを使い、軍に協力した。敗戦から数年後、わしとお前の父である齋ひとしと二人で、奴を倒したはずなのだが、死体が見つからなかった。この50年あまり、それが不安で時々奴が潜んでいた富士の樹海に行き、探っていたのだが、全く手がかりが掴めなかった。わしも半ば諦めかけていたところ

ろだった」

と説明した。藍は息を吞んで聞き入っていた。

「ところが、一週間前、奴の気を感じたのだ。この50年、片時も忘れたことのない奴の気をな」

「どういふことなの？」

藍が真顔で尋ねた。仁斎は首を横に振り、

「わからん。どういふことなのか、わからんのだ」と呟いた。

「小野仁斎……。たつぷりと礼をさせてもらうぞ。そして、その後……」

闇の中で、長髪長身の男は呟き、ニヤリとした。

次の日の朝である。相変わらず空は梅雨空で、はつきりしなかった。

「おはよう！」

「おはよう！」

由加と祐子と波子は、駅の改札口で落ち合い、一緒に歩き始めた。

「ねえねえ、夕べの、見た？」

「あいつ、やっぱり犯人だったのね」

「何かさ、途中から急に性格変わってない？ 突然あいつが犯人の話になったじゃん」

「そうだよねえ」

そんなことを話しながら、三人は高等部の正門をくぐった。

「ええっ？ 貴方が同行するの？」

藍は社会科教員室で剣志郎から昨日のことを聞かされて、仰天していた。

「お人好しね。給料日前でピンチなんでしょ？ お金、どうするのよ？」

「それがさ．．．．．」

剣志郎が説明しようとした時、藍はそれを遮るように、

「私は貸しませんからね。貴方に貸すようなお金は、一円も持っていませんから」

と言った。さすがに剣志郎もムツとして、

「お前になんか、誰が借りるか！ 武光先生が貸してくれることになつたんだよ」

と言つてしまつてから、ハツとして口を塞いだ。藍はキツとして剣志郎を睨みつけ、

「なーるほど。だからそのお礼につて、夕食を一緒に食べに行つた訳？」

「ち、ち、違うよ．．．？ どうしてお前がそんなこと知つてるんだよ？」

もうほとんど痴話喧嘩である。藍はツンと顔を背けて、

「偶然見かけたのよ」

「何でお前が怒るんだよ？」

剣志郎もカチンと来て怒鳴つた。藍は再び剣志郎を睨みつけて、

「怒つてなんかいないわよ」

「それが怒つてるつて言つてるんだよ」

「何よ！」

始業のチャイムが鳴つたので、口論は終わった。二人はムツとしたまま、教員室を出た。

麻弥は授業を終えると、教員専用のトイレに入り、鏡の前で化粧を直していた。ハンドバッグから口紅を取り出して、もう一度鏡に顔を向けた時、彼女は鏡の中に白装束の男が写っているのに気づいた。

「きゃああ！」

麻弥は大声を上げて振り向いたが、そこには誰もいなかった。

「気のせい？」

麻弥はスーツと大きく息を吸い、フーツと大きく吐いた。すると、「どこを見ている、武光麻弥？ 俺はここだ」

と男の声がした。麻弥は恐る恐る再び鏡を見た。するとそこには、やはり白装束の男が立っていた。

「きやーっ！」

麻弥は叫び声を上げ、そのまま倒れてしまった。鏡の中の男はニヤリとした。

藍は社会科教員室に向かう途中、背中に悪寒が走った。

「何今のザワザワツとした感じ……」

彼女は変に思い、振り向いた。するとそこには、麻弥が背中を向けて立っていた。

（武光先生？ 変ね……）

藍は首を傾げて、教員室に向かった。麻弥はチラッと藍を見て、ニツと笑った。

夕方になった。

仁斎は再び拝殿の裏にある石に向かって、姫巫女流の呪文を唱えていた。

「ひとふたみよ　いつむななやこのたり　ふるえ　ふるえ　ゆらゆらと　ふるえ」

小雨がパラついていたが、仁斎は少しも構わず、唱え続けていた。（何故だ？　何故今になって奴が……）

「仁斎！」

と男の声がした。仁斎はハツとして、上を見た。石の上に、仁斎より年上と思われる、白髪を長く伸ばし、後ろで束ねた口ひげの長い老人が、白装束姿で浮いていた。そう、浮いていたのである。

「貴様、やはり源斎！　生きていたのか？」

仁斎は険しい顔で浮遊している老人を睨んだ。源斎と呼ばれた老人はニヤリとして、

「そのとおりだ。貴様や、貴様の息子ごときにやられるほど、わしは落ちぶれてはおらぬ」

「何イ!？」

仁斎は拳をギュツと握りしめた。源斎はスーツと地面に降り立ち、  
「しかしあの時の礼はさせてもらつ」

と言った。仁斎は源斎からバツと飛び退いて、

「どうするつもりだ？」

「知れたこと。貴様に死んでもらうのだ」

と源斎はニヤリとして答えた。

剣志郎は社会科教員室の前で、ドアを開けあぐねていた。藍と顔を合わせるのが嫌なのだ。

（朝以来、一言も口利いてくれないもんなア・・・）

彼は意を決してドアを開いた。するとそこには世界史の先生がいなかった。

「あれ？ 小野先生は？」

と剣志郎が尋ねると、世界史の先生は、

「もう帰られましたよ」

と答えた。剣志郎は拍子抜けして、

「あ、そ、そうですか」

と答え、教員室に入った。

（やっぱり、避けられてるのかなア）

剣志郎は悲しそうに椅子に座り、溜息を吐いた。

一方由加達三人は、電車で家に向かっている途中であつた。

「ねえ由加、そう言えば、旅行に着て行く服、どうするの？」

と祐子が尋ねると、由加は、

「別にイ。特に買うつもりはないわよ。研究のための旅行だもん」

とすまして答えた。波子が、

「嘘ばっか。そんなわけないでしょ？ 同じ服はほとんど着ないあ



んたが、一着も買わないなんて」

「今ピンチなのよ。田辺君じゃないけど、武光先生に旅費みんな出してもらいたいわ」

由加は溜息混じりに言った。すると祐子も、

「そうよねえ。私も、服どころか、靴も買えないわよ」

「ねえ、おねだりしてみようよ、武光先生に」

と波子。由加は腕組みをして、

「そうねえ……。竜神先生との仲を取り持ってあげるからとか言  
って、説得してみようか」

「うん、それいいよ」

と波子と祐子は異口同音に言った。三人は顔を見合わせて、ニンマリした。

藍は社務所の前でバイクを停めた。そしてライダースーツの水滴をパンパンと弾いた。

「・・・」

彼女は何となく元気がなかった。ヘルメットを取り、社務所に入  
った。

「お祖父ちゃん？」

と彼女は仁斎を呼んだ。しかし薄暗い社務所の中には誰もいなかった。

「どこかしら？」

その時藍は、再びあのザワザワした感じを受けた。

「何？」

藍は社務所を飛び出し、拝殿の裏へと走った。どうしてそこに向  
かおうとしたのかわからなかったが、とにかくそこへ行く必要があ  
ると感じたのだ。

「お祖父ちゃん！」

藍は小雨でずぶ濡れになり、胸から大量の血を流して倒れている  
仁斎を見つけて、駆け寄った。

「お祖父ちゃん、一体どうしたの？」

「あ、藍か……」

仁斎は目をうつすらと開けて藍を見た。藍は仁斎を抱き起こした。「奴が現れた……。気をつける、藍……。奴は、女王の力を得ようとしている……。九州へ行け、藍……」

「女王？ 九州？」

と藍が尋ねると、仁斎はかすかに頷き、

「そうだ……。女王の力を奴が手に入れば、日本は闇に包まれる……。それだけはあつてはならぬ。何としても阻止しろ」

「でも私にはどうすることも……」

藍は涙声で言った。すると仁斎はフツと笑って、

「お前はわし以上に力を持っている。お前ならば、必ず奴に勝てる・

・・」

「私が？」

仁斎はゆっくり頷き、気を失った。藍はハツとして脈を診た。さすがに鍛えられた身体である。弱々しいながらも脈はまだあった。

藍は仁斎を背負うと、社務所に向かった。

翌日。

梅雨の中休みであろうか。空は雲一つない晴天になった。

「ねえねえ、聞いた？ 藍先生、休みだって」

と祐子が教室に飛び込んで来て言った。由加は机の上に腰を下ろして、

「知ってる。確か竜神先生と口喧嘩してたんでしょ、昨日」

「そうそう。竜神先生が武光先生と一緒に旅行に行くって聞いて、ヤキモチ焼いたらしいよ」

と祐子は言った。話が膨らんでいるようだ。由加は面白そうに笑って、

「それでショックのあまり、今日は休みか。哀れね、恋に破れた女って」

「そうね」

祐子もニヤリとした。

一方剣志郎は、藍が休みと聞いて、びつくりしていた。

（高校の時だって、40度の熱があっても授業に出たあいつが休むなんて・・・。まさか・・・）

しかしそれは当然剣志郎の誤解であった。藍は仁斎を病院に入院させ、一晩付き添ったので休んだのだ。

（とにかく、家に行ってみるか）

剣志郎は誤解を解いておきたかった。

## 第四章 九州へ

夕方になった。

藍は病院に行く用意をして、家を出た。

彼女の住む家は拝殿の正面から向かって右側にあり、昔造りの平屋である。彼女はボストンバッグを持ち、バイクに向かった。

「藍！」

とそこへ剣志郎が駆け寄って来た。藍はびっくりして、

「あれ？ どうしたの、剣志郎？」

と尋ねた。剣志郎はキョトンとして、

「どうしたのってどういうこと？」

と尋ね返した。

二人は社務所行き、話をした。

「そうか。お祖父さんが入院したのか」

「うん」

志郎は湯呑み茶碗をテーブルに置き、

「具合悪かったのか、お祖父さん？」

「いや、そうじゃないんだ」

藍は剣志郎を見て、本当のことを話そうか話すまいか迷っていた。

剣志郎は藍にジッと見つめられたので、ドキドキしていた。

（ な、何だ？ ）

剣志郎自身、何故これほどドキドキするのかわからなかった。

「じゃ、私、行かなくちゃ」

と藍は立ち上がった。剣志郎も立ち上がり、

「なア、藍」

と声をかけた。藍は振り向いて、

「何？」

「誤解しないでくれよ」

「何を？」

藍はツンとして言った。剣志郎は穏やかに、

「俺と武光先生は何でもないんだからな」

「それが？」

「へっ？」

剣志郎はポカンとした。藍はキツとして彼を睨みつけ、

「自惚れないでよ。私が貴方と武光先生のこと、嫉妬しているとでも思ってるの？」

「えっ？」

「バーカ」

藍はボストンバッグを持ち、ヘルメットを被ると、外へ出た。剣志郎は慌てて藍を追った。

「藍！」

「うるさい！」

藍はバッグをバイクの後ろにくくりつけると、サツと跨がり、あっと言う間に走り去ってしまった。

「何だよ、もう……」

剣志郎は自棄気味に言った。

藍は次の日も休んだ。そして、その次の日も……。

とうとう、由加達が剣志郎、そして麻弥と共に九州に行く日になった。

由加達は東京駅の新幹線ホームにいた。

「全く！ 何してるのよ、もっと余裕を持って来なさいよ」

真っ赤なベレー帽に、真っ白なブラウス、そして赤地にチェックのスカートを履いた由加は、お下げ髪をやめて髪を下ろすと、少し大人びて見えた。祐子は黄色い半袖のブランドもののＴシャツに、ライトブルーのキュロットスカートを履いている。ちよつと太めを気にしている彼女にしては、やけに身体つきがはっきりわかる服装である。また波子は、白のノースリーブのサマーセーターに、ブル

ージーンズのスカートを履いていた。いつもの彼女からは考えられないほど、短いものだ。

「わかったよ、うるせえな」

と不服そうに言ったのは、田辺である。他の二人の男子、奥野と佐藤は先に来ていた。三人とも、近所のコンビ二にでも行くような軽装だった。田辺はヨレヨレのＴシャツに、決してビンテージものには見えない、ボロボロのジーパン。奥野はある若手の俳優がよく着ているポロシャツに、古着とは言い難い綿パン。佐藤は他の二人に比べれば普通の服装に見えるが、いつ洗ったの、というような襟元のポロシャツに、ジーパンである。みんな眠そうだ。それもそのはず、彼らが乗るのは、午前６時７分発の、博多行きなのだ。

「あんた達、もっとましな服持つてないの？」

と祐子が言くと、田辺はムツとして欠伸を堪え、

「大きなお世話だよ」

「おい、東京を出る前からもめるなよ」

剣志郎が呆れて言った。彼も着古したポロシャツとジーパンで、

「ましな服」には見えない。

「そうよ、みんな仲良くして」

と剣志郎の隣でにこやかに言ったのは、白いブラウスに白いスカート、そして白い帽子を被った、まるで新婚旅行に行く新婦のような格好をした麻弥であった。この麻弥の服装には、由加達三人も、引きまかった。

そんな様子を、ホームの柱の陰から見ている者がいた。Ｔシャツの上にメジャーリーグのスタジャン、ジーパン、それに野球帽を被った、藍だった。彼女は剣志郎達一行に気づき、慌てて隠れたのだ。「何だよ、何で同じ新幹線なのよ」

藍は今見つかるかとまた誤解されると思い、帽子のつばを下げ、サングラスをかけてマスクをした。人目にはかなり怪しい格好だが、見つかるよりはましだ、と彼女は考えた。

「まさか座席まで近くになつたりしないわよね」

と藍は眩き、サツと車両に乗り込んだ。

闇。

その中に、源齋と白装束の男はいた。

「仁斎の居場所がわからなくなった。どうやらあの小娘が、結界を張ったらしい」

と源齋は男を見ずに言った。男は頷き、

「はい」

と答えた。源齋はチラッと男を見て、

「小娘の始末はお前に任せる。奴が九州に行き、鬼を完全に封じてしまふ前に、消せ」

「はっ」

源齋はフツと笑って、

「昔のことで、情けなどかけるなよ、雅<sup>みやび</sup>」

「かけません。情けなど、私の身体のどこにも存在しておりません」と雅は答えた。源齋は満足そうに頷いた。

藍の予想は外れてしまった。

彼女の乗る新幹線は全席指定で、他の新幹線に換える訳にも行かず、席に着いた。斜め前の席に剣志郎と麻弥、彼女の真向かいには由加。藍は通路側の席なので、真ん中の席の剣志郎からも、通路側の席の麻弥からも見える。隣は知らない男、由加の隣はあまり印象のない佐藤。彼は憧れの由加の隣で、心ここにあらずといった感じだ。よりに寄って藍は、一番目ざとい由加と向かい合わせ、関わりたくない麻弥とは斜向い。博多まで気づかれない自信がなかった。

「あれ？」

由加のその声に、藍はギクツとした。

（気づかれた？）

しかし由加は、自分のバッグの中を見ていた。

「おかしいな、口紅がない」

「そんなもの、必要ないだろ、高校生に」

と剣志郎が言うと、由加はムツとして剣志郎を見て、

「そんなことありません！ 私もう１７歳ですよ。子供じゃないんですから」

「でもね、古田さん、お化粧はししないですんだ方がいいのよ」

と麻弥はニコニコして言った。由加は麻弥を見て、

「それはそうかも知れませんが・・・。それじゃまるで、小野先生みたいじゃないですか。化粧つ氣ないなんて」

麻弥と剣志郎はその由加の返答に苦笑した。藍はその様子を見てムカツとしたが、どうすることもできない。

（こんなところで私の悪口言わないでよ、古田さん！）

と藍が思った時、今度は通路を挟んで隣に座っている祐子が、  
「あつ、こら！」

と叫んだ。剣志郎が、

「何だ？ うるさいぞ、水野。こんなところで大声を出すな」

「だって、田辺君が私のポテトチップスを盗ったのよ、先生」

と祐子は膨れっ面をして訴えた。剣志郎は、そんなことで騒ぐなよ、という顔で、

「まア、いいじゃないか。ほしけりや買ってあげるから」

「だってエ・・・。」

祐子はしつこい。波子が隣で、

「だから田辺君に見せちゃダメだって言ったのよ」

「何だよ、その言い方は？」

と今度は田辺がムツとした。そんな光景を藍はあきれ果てて見ていた。そして、病院で仁斎に言われたことを思い出した。

藍は仁斎を個室に入院させてもらい、病室の四隅に盛り塩をし、注連縄を壁に張りつけて結界を作った。こうしておけば、仁斎を殺そうとした連中に、仁斎の居場所を見破られないのだ。  
「藍」



仁斎はベッドの脇に立っている藍を見た。藍も仁斎を見た。

「よいか。わしの命を狙ったのは、小野源斎と言う男だな。幕末に生まれて、歳は150歳を超えている、まさしく化け物のような男だ」

「150歳!？」

藍は仰天した。仁斎はゆっくりと頷き、

「そうだ。奴は我が姫巫女流と暗黒呪術を組み合わせで作られた、黄泉路古神道を修得している」

「黄泉路古神道を？」

藍は椅子に腰掛けた。仁斎は続けた。

「黄泉路古神道はその名の通り、黄泉の国の魔物共を使って人を呪殺したり、時の流れに逆らって、不老不死となったりするための呪術を使う、邪な呪法だ。決して、奴らの思い通りにさせてはならぬ」

「はい」

藍は大きく頷いた。仁斎は天井を見つめて、

「源斎の目的は恐らく九州の夜須川に封じ込められた鬼を甦らせることだろう」

「鬼？」

「うむ。藍、お前は九州に行き、鬼を完全に封じるのだ。二度とこの世に現れぬようにな」

と仁斎は藍を見た。藍は、

「でもどうすればいいの？」

「心配するな。このような日のために、お前はわしのそばでわしのしていることを見て来たのだ。手順を教えるから、その通りにすれば必ず鬼を封じ込められる」

「わかったわ」

藍は再び大きく頷いた。

新横浜を通過する頃になると、由加達は居眠りを始めていた。日頃の夜更かしが祟って、朝は弱いのだろう。藍も腕を組んで眠ろう

とした。

「先生」

とその時、妙に色っぽい麻弥の声がした。藍は顔を動かさずに目だけで麻弥を見た。彼女は剣志郎の腕に自分の腕をからませていた。

（何してるのよ、この女は？）

藍は思わずムツとしてしまった。すると剣志郎が、

「武光先生、まずいですよ。生徒達が一緒なんですから……」

「

（生徒達が一緒でなければどうするつもりなのよ？）

藍はついそんなことを考えてしまい、ハツとして二人から目をそらした。目の前の由加は、すでに船を漕ぎ始めている。田辺や祐子達も、ウトウトしていた。佐藤一人が、由加の寝顔をドキドキしながら見ていたが、剣志郎達には注意が向いていない。

「あら、みんな眠ってますわ。何でしたら、個室に個室があるようですから、そちらにうつりましょうか？」

麻弥の大胆発言に藍はビクンと動いてしまった。剣志郎がそれに気づいたらしく、

「武光先生、冗談はやめて下さい。この旅行は遊びではなくてですね……」

と小声で言うと、麻弥はフツと笑って、

「あら、他人の目を気にするなんて、竜神先生って結構純情なんですよ」

と言った。剣志郎は呆れ顔で、

「とにかく、私も休ませていただきますので」

と言って、シートにもたれかかり、目を瞑った。麻弥は仕方なさそうにシートにもたれ、窓の外に目をやった。藍は二人を見るのをやめて、寝た振りをした。その時、彼女の身体を悪寒が走り抜けた。

（またあのザワザワだ……。この前武光先生から感じたのは気のせいだと思っただけ、やっぱり……）

藍はまた顔を動かさずに麻弥を見た。すると麻弥は不意に席を立

ち、車両を出て行った。

（武光先生、変だ……。何だろう？）

藍は麻弥が何しに行ったのか気になったが、向かいの由加が起きるとまずいので、仕方なく麻弥が戻るのを待つことにした。

麻弥はトイレの隣にある洗面室の鏡の前にいた。その鏡の中には、白装束の男、すなわち雅と呼ばれた長髪の男がいた。

「いいか、お前は小倉で途中下車して、宇佐に向かうのだ。もう一人の教師、竜神剣志郎には、甘木に行くように仕向ける。宇佐でこゝとがすめば、夜須川の鬼の封印は破りやすくなる」と雅は言った。麻弥はうつろな目で頷いた。

藍はいつの間にか、すっかり寝入ってしまった。新幹線は、名古屋に近づいていた。

「あれ？」

由加は、目の前にいる帽子を目深に被りサングラスにマスクをした、妙な雰囲気女性の女性がウトウトしているのに気づいた。

「この鼻と顔の輪郭、どこかで見たような……」

由加はジッと藍の顔を見つめた。剣志郎がフツと目を開いて由加に気づき、

「こら、古田。他人の顔をあまりジロジロ見るんじゃないよ」

と注意した。すると由加は剣志郎を見て、

「だってこの人、多分小野先生ですよ」

「えっ？ 小野先生？」

と剣志郎も席を立ち、マジマジと藍の顔を近くで見た。麻弥も目を覚まして、

「小野先生がどうかしましたの？」

と寝ぼけマナコで尋ねた。

「ほーら、やっぱり！」

由加は帽子とサングラスを外して言った。剣志郎と麻弥はびっく

りしていた。

「えっ？」

そこでやっと藍は目を覚ました。周囲に由加、剣志郎、そして麻弥がいるのに気づき、藍はハツとした。

（ここ、新幹線の中だった！）

彼女は帽子とサングラスを由加が持っているのを見て、全てバレていることを知った。

「あっ……」

藍は真つ赤になって下を向いてしまった。頭の中がグルグル回り、わけがわからなくなり始めた。

新幹線が名古屋を出た頃になって、ようやく藍も落ち着き、話を始めた。

「九州にね、用があつたんだ。まさかみんなと同じ車両だなんて思わなくてさ……」

「何でサングラスなんかかけて、マスクまでしてたの？」

と由加が意地悪く尋ねた。藍は由加を見て、

「そ、それはその……」

「ホントは、竜神先生と武光先生の間に何かあるんじゃないかって心配になって、変装して着いて行くつもりだったんでしょ？」

由加はまるで名探偵気取りで言った。藍はムツとして、

「違うわよ！ そんなんじゃないってば」

「ムキになって否定するところが怪しいなア」

由加はますます意地悪く言った。藍は重ねて反論しようとしたが、剣志郎が、

「小野先生、ちょっと……」

とデッキの方を親指で示し、立ち上がった。藍は頷いてそれに従い、デッキに出た。

「何かあつたのか、藍？ お祖父さん、入院しているんだらう？」

剣志郎は声を低くして尋ねた。藍は扉に寄りかかって、

「お祖父ちゃん、ある男に殺されかけたのよ」

「ええっ!？」

剣志郎は仰天して藍を見た。藍は、

「私の家と私のことを知ってる貴方にだけ話しておくわね」

と言い、源斎のことや、九州に行く理由について説明した。剣志郎はあまりの話の内容に一瞬呆然としてしまったが、

「そうか。わかった。武光先生には話すか？」

「いえ、やめた方がいいわ」

と藍は首を横に振って言った。剣志郎は肩を竦めて、

「そうだな。騒ぎを大きくするだけだな」

「違うの。武光先生に話さないでほしいのは、別に理由があるからなのよ」

と藍は辺りを見回しながら言った。剣志郎はキョトンとして、

「別に理由がある？ 何だ、それは？」

「今は言えない。もう少し待って」

「ああ」

二人は席に戻った。

「何を話していたんですか？」

と由加がニヤニヤして尋ねると、剣志郎が、

「お前には関係ないことだ」

「えーっ!？」

由加はそう言って剥れた。今度は麻弥が、

「本当に何を話しておられたんですか？」

と藍に尋ねた。藍は苦笑いをして、

「大したことじゃないんです。気にしないで下さい」

と答えた。麻弥は不服そうに剣志郎を見てから、

「そうですの」

と言い、黙ってしまった。

## 第五章 小野 雅

新大阪を出た時、藍は剣志郎達と遅めの朝食を食べていた。

「すみません、武光先生。私、慌ててたもので、何も用意して来なくて……」

藍は麻弥が作って来たサンドイッチをつまみながら、申し訳なさそうに言った。麻弥は作り笑いをして、

「いいえ。竜神先生にいっぱい食べてもらおうと思って、たつくさん作って来ましたから、大丈夫ですわ。ドンドン、召し上がって下さい、小野先生」

と皮肉たつぷりに言った。藍は苦笑いをしていたが、何も言い返せなかった。向かいの由加が、

「武光先生つて、美人でお料理が上手で、英語もペラペラで……。おまけに家がお金持ちで。きつといい奥さんになりますよね、竜神先生？」

と言うと、剣志郎はドキツとして麻弥を見たが、麻弥はニッコリして、

「あら、そんなことないわよ、古田さん」

と言いながら剣志郎を見た。藍はムスツとしてサンドイッチを呑み込んだ。その時、

「ああ、もうどうしてそういうことするのよ!？」

と祐子が叫んだ。どうやら祐子の朝食のおかずを田辺が盗ったらしいのだ。田辺は海老フライをムシヤムシヤ食べながら、

「いつまでも食わないでいるから、嫌いなのかと思ったのさ」と言い放った。祐子はカチンと来て、

「一番好きなものを最後に食べるのよ、私は!」

「そんなことしてると、急に大地震が来て死んじゃった時、後悔するぞ」

「大きなお世話よ!」

田辺と祐子は本当は仲がいいのかも知れない、と藍は思いながら、二人のやり取りを見ていた。

「そう言えば田辺君はどうして京都で降りなかったのよ？ 邪馬台国は近畿にあつたんでしょ？」

と波子が言った。田辺はムツとして波子を睨み、

「今回は奥野の説の欠点を指摘してやるために、九州まで行くことにしたんだよ」

と言いつ返した。すると今度は奥野が、

「何言ってるんだよ。本当は水野が九州に行くから、一緒に行きたいんだろ？」

「ち、違うよ！」

田辺は真つ赤になつて否定した。祐子も顔を赤らめて、

「奥野君、何てこと言つのよ！？」

と口を挟んだ。麻弥はそれを微笑んでみていたが、やがて、

「そうそう。小野先生は、何故九州に行かれるのですか？」

と藍を見た。藍は麻弥のサンドイッチに目をやりながら、

「実はその、邪馬台国最大の秘密がある場所へ行こうと思ひまして・・・」

とつい口を滑らせてしまった。言ってからハツとなつて、藍は手で口を塞いだ。

「邪馬台国最大の秘密って何ですか？」

奥野が目を輝かせて尋ねた。藍は作り笑いをして、

「いえあの・・・。うーんと、そうそう、古事記や日本書紀に出て来る、高天原を流れる天の安河と思われる川に行くのよ」

「天の安河？」

これには由加や祐子達も興味をそそられたらしく、藍をジッと見た。田辺も耳を傾けている。藍は困り顔をして、

「福岡県の甘木市を流れる筑後川の支流の一つに、小石原川という川があるのよ。その川の名は別名夜須川とも言つて、天の安河と同じ音なの」

「なアんだ。そんな音の一致くらいで、最大の秘密がある場所なんて言わないで下さいよ」

と田辺は呆れ顔で言った。由加もいささか拍子抜けしたように、

「そんなの、秘密でも何でもないですよ」

「あら、そう？　そうか、ハハハ・・・」

と藍は妙に陽気に笑った。剣志郎と麻弥は思わず顔を見合わせてしまった。

（　良かった。何とか誤摩化せたわね　）

藍は内心ホツとしていた。

「それより・・・」

麻弥がニツコリして言った。藍はビクンとして麻弥を見た。麻弥はチラツと藍を見てから剣志郎に目を向けて、

「邪馬台国の秘密を求めて行くのなら、九州で二手に別れた方がいいと思いますの」

と妙に色っぽい口調で言った。剣志郎はドキツとして麻弥を見た。

「そ、そうですね」

「二手に別れる？」

と由加が口を挟んだ。麻弥は由加を見て、

「ええ。第一グループは小倉で下車して、日豊本線で宇佐に向かう。そして第二グループは博多まで乗車して、鹿児島本線に乗り換え、基山まで行き、そこから甘木鉄道に乗り換えて、甘木に向かう」

「なるほど。九州説でも代表的な、甘木説と宇佐説を探る訳ですね？」

と奥野が興味深そうに言った。麻弥は大きく頷き、

「そうよ。宇佐には、比売大神ひめのおおかみと呼ばれる、卑弥呼ではないかと思われる神を祀っている宇佐神宮があるし、甘木付近には、大和と同じ名称の地がたくさんあるわ。どちらもかなり邪馬台国としての資格を持っている場所よ」

「先生って、歴史にも詳しいんですね」

と祐子が感心して言うと、麻弥は再びニツコリして、



「まアね」

と言い、チラッと剣志郎を見た。

（変だわ。江戸時代の前が鎌倉時代だなんて言っていた武光先生が、ここまで古代史に詳しいなんて．．．．．）

藍は不審そうに麻弥を見た。するとそれに波子が気づき、

「小野先生、そんなに嫉妬心むき出しで武光先生を睨まなくてもいいでしょ？」

と言ったので、藍は赤くなつて、

「な、何言ってるのよ！」

と叫んだ。由加達は大笑いをした。剣志郎と麻弥もクスクス笑っていたので、藍はムツとした。

（何よ、全く！人の気も知らないで！）

「どういふふうに分れますか？」

と田辺が尋ねた。麻弥は一瞬考えるような仕草をしてから、

「私が宇佐に行くわ。田辺君と水野さん、それから佐藤君は私と一緒に。竜神先生は古田さんと江上さん、奥野君と一緒に甘木に行つて下さい」

「わかりました」

と剣志郎が答えると、由加が、

「藍先生はどうするの？」

と口を挟んだ。麻弥は、

「そうですね。どうなさいます？」

と藍を見た。剣志郎も藍を見た。藍は考え込んだ。

（順序としては、甘木に行きたいけど、武光先生のことも気になるし．．．．．）

「ねえ、先生！」

と由加が藍の膝を突ついた。藍はハツとして顔を上げ、

「わかりました。私、宇佐に行きます。比売大神は、私の家の神社と縁のある祭神ですから」

と答えた。藍は一瞬ではあったが、麻弥の顔が殺氣立ったのに気づ

いた。

（何、今の？）

藍達の乗る新幹線は、九州に入っていた。広島を過ぎた辺りから雲が多くなっていたのであるが、トンネルに入る頃には、すっかり雨模様になっていた。しかし今は藍達はトンネルの中。九州に降る雨は、小倉駅のそばまで行かないと見られない。

「トンネルを出たら、すぐに小倉に到着するわ。小倉で降りる人達は、そろそろ準備をしてね」

麻弥は身支度を整えながら言った。

「はい」

田辺達は棚からバッグを下ろして、座席の上に置いた。藍も立ち上がった。その時新幹線がトンネルの外に出た。窓の向こうに、雨に煙る北九州の街が見えた。

「では竜神先生、古田さん達のこと、お願いしますね」

「はい」

小倉駅で降りた藍達は、剣志郎達と別れると、宇佐に向かうべく、日豊本線にちりん17号に乗り換えるため、新幹線ホームを離れた。宇佐までどのくらいかかるんですか？」

と祐子が尋ねた。麻弥は時刻表を調べながら、

「一時間弱つてところね。のぞみに比べるとずっと遅いから、随分乗っているように感じるわよ」

「そうですか」

祐子は退屈そうに言った。田辺が、

「佐藤、残念だったな、古田と別々になつてさ」

と冷やかすと、佐藤は赤くなりながら、

「そ、そんなことないよ」

と言い返した。藍は二人のやり取りを見ながら、

「武光先生、宇佐に着いたら、まずはどうします？ やっぱり、宇

佐神宮ですか？」

と麻弥に尋ねた。麻弥はニツコリして、

「そうですね。まずはそこでしょうね」

と答えた。その時藍は、また悪寒を感じた。

（まだ。間違いない。原因は、武光先生だ）

藍は麻弥の後ろ姿をジッと見つめながら、ホームの階段を降りた。

一方、剣志郎達の乗る新幹線も博多駅を目前にしていた。

「今頃、武光先生と小野先生、火花バチバチでしょうね」

と由加が嬉しそうに言うと、剣志郎はとぼけて、

「何でだ？」

「決まってるでしょ。竜神先生のことですよ」

と波子が口を挟んだ。剣志郎は呆れ顔で、

「そんなわけないだろう」

「じゃあ聞きますけど、先生は武光先生と小野先生、どっちがタイプですか？」

と言ったのは由加。剣志郎はムツとして、

「お前なア……」

「私は竜神先生の好みを聞いているんですよ」

由加はしつこく尋ねた。剣志郎は窓の外に目をやって、

「小野先生は高校時代の同級生。武光先生は大学の時の後輩。それだけだ。だからどちらが好みとかは発言できないよ」

「なるほど。小野先生のことを先に言ったから、やっぱり小野先生のことが好きなんだ」

と波子が冷やかした。剣志郎は図星を突かれてムキになって波子を睨むと、

「そうじゃないよ！」

と否定した。しかしそうになると余計面白がるのが由加と波子なのだ。

「わーっ、先生赤くなった！」

「なってるないよ！」

まるで子供である。それに気づいたのか、剣志郎は再び窓の外に目をやって黙り込んでしまった。

藍達にはちりん17号に乗り込んだが、あいにく席がかなり混んでいて、藍と麻弥、祐子と田辺と佐藤に別れて座った。

「小野先生」

麻弥は藍の隣に腰を下ろすなり小声で言った。藍はビクツとして麻弥を見た。

「何ですか？」

麻弥はニヤツとして、

「久しぶりだな、藍。元気そうで何よりだ」

と急に男の声で囁いた。藍はハツとして、

「誰？」

と麻弥を睨んだ。麻弥は前を向いたまま、

「忘れたのか？ 無理もない。あれから10年経つのだからな」

「えっ？」

藍の脳裡に10年前のある記憶が甦った。

10年前。

藍はまだ中学3年生だった。彼女が家に帰ると、真っ青な顔の仁斎が玄関で出迎えた。

「どうしたの、おじいちゃん？」

その頃の藍はまだ三つ編みの似合うあどけない顔をした少女であった。しかし仁斎のただならぬ様子に、その顔は一変した。仁斎はポソリと言った。

「お前の両親が乗った旅客機が、空中で爆発した・・・」

「えっ？」

藍は一瞬仁斎が何を言っているのかわからなかった。感情より先に反射が起こった。涙が頬を一筋、二筋と伝わって行くのを感じた。「全員絶望だそうだ・・・」

と仁斎は唇を震わせて言った。藍はそのまま玄関先に座り込んでしまった。悲しいという感情が湧いて来るのに、しばらくかかった。本当に悲しい時はそんなものだ。泣きわめいたり、取り乱したりするのは、ヘタな役者や演出家のする、作り事なのだ。真の悲しみに襲われた時、人は表現力を失うのである。

「奴の仕業だ」

仁斎がそう呟いたのを藍は聞き取り、仁斎を見上げた。

「雅め、小野家を追放されたことを逆恨みし、あのようなことを・・」

「そんな・・」

藍には仁斎の短絡的な考え方が信じられなかった。何故なら、雅とは、藍が生まれた時から決められていた、許婚だったからである。「やはり、親と同じか。奴の両親は、第一分家の人間でありながら、邪な呪法を研究し、自分のものにしてしていた。そのため、わしは奴の両親を追放し、奴を斎の養子とし、お前と夫婦とするつもりだったというのに！」

と仁斎は齒ぎしりした。

小野家は、藍のいる宗家の他に、日本各地に分家があり、雅のいた分家は島根県出雲市にあった。その第一分家の当主である雅の父親が、ある日突然、邪な呪法、すなわち黄泉路古神道を修めようと研究し始めたのであった。

「今にして思えば、追放するだけでなく、記憶も封じるべきだった。雅は恐らく、黄泉路古神道のことを両親から聞かされているはずとなれば・・」

雅を引き取り、宗家の跡継ぎにと考えた自分の愚かさを悔やむ仁斎であったが、藍には旅客機の事故が雅の仕業とはどうしても思えなかった。

「雅、なの？」

藍は半信半疑で尋ねた。麻弥はフツと笑って再び藍を見て、

「そうだ」

と答えた。藍は深く溜息を吐き、

「何のマネ？ 武光先生をどうするつもりなの？」

しかし麻弥は何も答えず、前を向いた。スーッと麻弥が元に戻るのが藍にはわかった。

（雅．．．．．）

藍は悲しそうに俯いた。麻弥はハッと我に返り、藍を見た。

「どうかなさいました、小野先生？」

「あつ、いえ、別に．．．．．」

藍は作り笑いをして、麻弥を見た。

「そうですか？」

麻弥は不審そうに藍を見た。

剣志郎達は博多駅で鹿児島本線11時36分発の普通電車に乗り換えるために、構内を移動中であつた。

「何か少し肌寒いな」

剣志郎は梅雨空を恨めしそうに見上げて言った。由加が、

「小野先生と武光先生がいないからでしょ、竜神先生？」

と冷やかすと、剣志郎はカチンと来て由加を睨み、

「お前なア．．．．．」

由加はケラケラ笑つた後、

「でも私がいますよ、先生イ」

と色気を出したつもりか、ウィンクした。剣志郎は呆れたが、奥野はドキツとして由加を見つめた。波子が、

「それに私もね」

と剣志郎の左腕に自分の右腕をからませた。剣志郎はすっかり弱つていたが、奥野はそれを羨ましそうに見ていた。

正午になつた。

藍達は宇佐駅でにちりん17号を降り、駅の外に出た。雨はやん

でいたが、空には鉛色の雲が立ち込めていて、太陽は全く顔を出さず  
気配がなかった。

「ここから宇佐神宮まで4km弱というところですね。タクシーで  
行きましょうか」

駅の前を走る国道10号線を眺めながら、麻弥が言った。藍は帽  
子を被り直して、

「そうですね」

と答えた。田辺と祐子は相変わらず何か口喧嘩をしていた。佐藤が  
そんな二人を仲裁している。

（昔の私達みたいだな）

藍は祐子を自分に、田辺を剣志郎に重ねて、懐かしそうに二人を  
見ていた。

（いつからこんなに曲がった考え方をするようになったの  
かな）

藍は悲しくなつて帽子のつばを下げた。

剣志郎達は基山駅に到着し、甘木鉄道に乗り換える途中であつた。

「先生、ちょうどいい時間だから、お昼にしましょうよ」

と波子が提案した。剣志郎は足を止めて腕時計に目をやった。正午  
を少し過ぎたところだつた。

「そうだな。そうするか」

「わーい！先生の奢りね！」

とすかさず由加が言った。剣志郎は、

「お、おい！」

と慌てて、スタスタとレストランに向かう由加と波子を追いかけた。  
奥野はそれを見て苦笑しながら、後から歩いて行った。

## 第六章 宇佐神宮の秘密

源斎は闇の中にいた。

「宗家の小娘が宇佐に行くとはな．．．。雅、邪魔されるでないぞ」

源斎はそう呟き、ニヤリとした。

藍達は、藍と麻弥と佐藤、そして田辺と祐子に別れてタクシーに乗った。分けたのはもちろん麻弥である。

『藍、聞こえるか？』

藍は心の中に直接語りかけて来る雅の声にハツとして、助手席に乗っている麻弥の横顔を見た。麻弥の目はうつろで、何も見ていなかった。隣の佐藤は、窓の外を見ている。運転手は大人しそうな年配の男で、何も話しかけて来る様子はなかった。

『宇佐神宮で、面白いものを見せてやろう。楽しみにしている』

雅の声はそれきりなくなり、麻弥は表情を取り戻していた。

（雅．．．。宇佐神宮で何をするつもりなの？）

藍は表情を強ばらせた。

剣志郎達は甘木駅に到着していた。由加は不機嫌そうだ。何故なら、レストランが満席で、空席待ちの観光客が何十人もいたため、剣志郎が諦めさせたからだ。

「さてと。甘木まで来たのはいいが、ここから先はどこへ行けばいいのかな？」

と剣志郎が言くと、由加は急ににこやかになり、

「じゃあ取り敢えず、お食事にしましょう」

と提案した。剣志郎は肩を竦めて、

「はいはい。わかりました」

と同意した。由加と波子は顔を見合わせてニンマリとした。



藍達は宇佐神宮の上宮の前に来ていた。

「こんなに歩くと思わなかったよ。駅前で昼飯食べて正解だった」

田辺は息が苦しそうだ。祐子もゼイゼイ言いながら、

「ホント。帰りもまた歩くかと思うと、うんざりするわ」

と弱音を吐いた。麻弥はそれを微笑んで見ていたが、佐藤が周りを見渡ししながら、

「何かここ、古墳みたいですね」

と言ったので、

「あら、佐藤君、いい感覚してるわね。そうよ。ここは古墳なのよ」と答えた。藍はビクツとして麻弥を見た。

（武光先生が喋ってるんじゃない。雅だ。雅が喋らせているんだ。．．．）

「一体誰の古墳なんですか？」

祐子が息を整えながら尋ねた。田辺も汗を拭いながら麻弥を見た。

麻弥は上宮の御殿に目を向け、

「誰かしらね」

と言うと、ニヤリとし、チラッと藍を見た。藍の額に汗が伝わった。雨がやんでむすような感じだが、藍はここまで歩いて汗はかいていなかった。暑くてかく汗ではないのだ。

「先生、知ってるんですか？」

麻弥の視線に気づいた田辺が、藍に尋ねた。藍はハッとして田辺を見て、

「知らないわよ。ここが古墳じゃないかという話は知ってたけど．．

．．」

「なアんだ、つまんない」

と祐子は残念そうに言った。すると麻弥が祐子を見て、

「そんなに知りたい？」

「ええ」

祐子は麻弥の言い方にドキツとしたのか、半歩下がって応えた。

麻弥の目は、いつもの彼女のホンワカしたものではなかった。しかし、彼女はニコツとして、

「この神社は、応神天皇、つまり神武天皇から数えて16代目の天皇なんだけど、その応神天皇の母親である神功皇后、そして比売大神の三神が祀られているの。比売大神は、三人の女神で、タギツヒメノミコト、イチキシマヒメノミコト、タギリヒメノミコトというお名前なの」

祐子はホツとした顔で頷いた。麻弥の顔がいつもの穏やかな顔に戻ったからだ。麻弥は御殿の反対方向を見て、

「ここに来る途中、大きな池があつたでしょ？ あの池、菱形池つて言っただけど、あの池は、この小椋山、または亀山と呼ばれる今私達がいるこの場所を築くために土を掘り出した跡なのよ」

「はい」

田辺と佐藤も、麻弥の話に聞き入っている。しかし藍は警戒をしながらまだった。

「そしてこの宇佐神宮の不思議なところは、主神であるおうじんてんのう応神天皇、すなわち、八幡大神が、向かって左側に祀られていて、中央に比売大神、右に神功皇后じんくこうこうが祀られているの。これ、ということだから？」

と麻弥は祐子達を見て尋ねた。田辺は、

「比売大神が祀られているところに、応神天皇と神功皇后を祀ったので、こうなつたんですか？」

と言った。麻弥は微笑んで田辺を見ると、

「近いわね。でもちよつと違うのよ。神社が造られて、最初に設祀されたのは、応神天皇なのよ。それなのに中央に祀られたのは、比売大神だったの」

「てことは、応神天皇より、比売大神の方が格が上だったんですか？」

田辺は少しわかって来たという顔で尋ねた。麻弥は頷いて、  
「そういうこと。でも、後になって応神天皇を主神とするようにな

り、左が上座ということになったわけ」

「はア・・・」

田辺は、祐子や佐藤と顔を見合わせた。祐子が唾を呑んでからゆつくりと、

「ということは、天皇より格が上つて・・・その・・・」

と言いかけて口籠ると、麻弥は、

「そう。貴女の考えていることは正しいわよ。天皇より格が上の神。そして、大神と呼ばれている女神は一人しかない。天照大神よ」と言った。祐子はびっくりして田辺に目をやった。田辺は何も言わずに祐子を見ていた。佐藤も黙ったままだ。

「でもそれは少し話が本末転倒ね。比売大神が天照大神なのではなくて、比売大神が天照大神の原型だったと言った方が正しいわね」と藍が口を挟んだ。麻弥の顔が一瞬殺氣立った。

「どういことですか？」

佐藤は眼鏡をクイツと上げて尋ねた。藍は佐藤に目を転じて、  
「つまりもともこの地に祀られていた比売大神、いえ、別の名前があつたと思うんだけど、その神は応神天皇や神功皇后とは直接関わりのなかった神なのよ」

「ええっ？」

佐藤はキョトンとしてしまった。祐子と田辺は、顔を見合わせてポカンとしている。麻弥はますます殺氣立って藍を睨みつけた。

「要するに、この地に眠っているのは、倭国の女王で、そこに便乗したのが九州遠征をしていた仲哀天皇ちゅうあいてんのうを建内宿禰たけしうちのすくねの手引きによって暗殺させた、神功皇后と応神天皇の親子」

藍がそう言うと、麻弥はギリギリと歯ぎしりした。

「仲哀天皇を暗殺させた？」

田辺が仰天して叫んだ。藍はチラリと麻弥を見てから、

「そう。天皇家は何回か断絶していると唱える学者がいるけど、そのとおりなのよ。仲哀天皇が暗殺されて、最初の天皇家の血筋は途絶えたの」

「でも応神天皇は仲哀天皇と神功皇后との間にできた子供でしょう？血筋は途絶えた訳ではないですよ」

と田辺は反論した。しかし藍は首を横に振り、

「違うわ。応神天皇は仲哀天皇の子供ではないの。いえ、神功皇后の子供でもないわ。彼は神功皇后の恋人だったの。そして神功皇后は仲哀天皇の妹だったのよ。応神天皇は他の妃との子供を跡継ぎにしたから、仲哀天皇で血筋は途絶えているのよ」

「何ですって!？」

田辺も祐子も佐藤も、すっかり驚いていた。すると麻弥がニヤリとして、

「藍、日本史の授業はその辺にしておけ。これから面白いものを見せてやる」

と男の声で言った。

「た、武光先生、その声は一体・・・？」

と祐子は蒼ざめて言った。田辺と佐藤はギョツとして麻弥を見た。

「三人共、武光先生から離れなさい！」

藍はキツと麻弥を睨んで叫んだ。祐子達は後ずさりをして麻弥から離れた。周囲にいた観光客達も、麻弥から発せられる異様な殺気を感じ、身じろいだ。

「黄泉醜女ヨミツグメ！」

麻弥は藍を右手の人差し指で指し示して叫んだ。するとその指先から、顔の半分が腐り落ちた化け物が現れ、藍に向かった。

「うわアッ！」

田辺は腰を抜かしてへたり込んだ。佐藤は真っ青になってへナヘナとしやがんでしまった。祐子は、

「きゃああっ！」

と絶叫して気絶した。観光客達も仰天し、逃げ出した。倒れる者、泣き叫ぶ者。様々だった。

「神剣十拳の剣！」

藍が右手を振ると、彼女の右手に1mほどもある光り輝く長剣が

現れた。

「はっ！」

神劍が宙を斬り、化け物は一刀両断され、煙のように消えた。藍は再び麻弥を睨み、

「雅！ いい加減、武光先生から離れて姿を現しなさい。女を操って戦うなんて、貴方らしくないわよ」

と叫んだ。

「そうだな」

麻弥の背後の空間に、突然長髪の男が現れた。小野雅であった。

彼はニヤリとして、

「俺が宇佐に來た理由がわかるか？」

「女王の力を借りて、夜須川に封じられている鬼をこの世に解き放つつもりね」

と藍が言つと、雅は倒れかけた麻弥を抱き止めて、ゆっくりと地面に寝かせてから藍を見て、

「半分当たっている」

「半分？」

藍はキツとした。雅はフツと笑つて、

「お前がこの俺に勝てると思つていいのか？」

「何ですって！？」

藍は十拳の劍を下段に構え、一步前に出た。雅は不敵な笑いを口元に浮かべて、

「黄泉劍！」

と叫んだ。すると彼の右手に漆黒の劍が現れた。何もかも吸い込んでしまいそうな黒さの劍である。形や長さは、十拳の劍と全く同じに見えた。

「行くぞ！」

雅は劍を振り上げ、藍に突進した。振り下ろされる漆黒の劍、そしてそれを受ける藍の劍。火花が飛び散り、藍の靴が地面にめり込んだ。

「どうした？ 姫巫女流の力、その程度か？」

と雅が嘲笑すると、藍はムツとして雅の剣をはね除け、

「姫巫女流を舐めるな！」

と叫んだ。雅はまたニヤリとした。そしてバツと後ろに飛び退き、剣を地面に突き立てると、柏手を打った。藍はハツとして一歩退いた。

「黄泉路古神道奥義、ましんれい魔神霊召喚！」

「・・・！」

藍はギョツとした。

（魔神霊というのは、黄泉の化け物と人霊を合わせた混合霊体と聞いている。一体何を？）

地鳴りがして、亀山全体が揺れ始めた。

「まさか、魔神霊って・・・。」

と藍が口にした時、彼女と雅の間の地面を裂いて、真っ黒な固まりが吹き出した。それは宙に浮かび、やがて古代人の男の姿になった。黒いままなので、顔などはわからなかったが、髪型や服の輪郭などで、弥生時代頃の人間らしいことはわかった。雅は高笑いをしてから言った。

「お前の読み通りだ、藍。卑弥弓呼だ」ひみこい

「やはり・・・。」

藍はギリツと歯ざしりし、魔神霊を見上げた。

卑弥弓呼とは、邪馬台国と覇権争いをしていたと思われるくなく狗奴国の王である。邪馬台国のことが比較的詳しく書かれている中国の史書である三国志の一書の魏書の倭人の条でも、狗奴国は邪馬台国と対立していることが書かれているのみで、その実体はわかっていない。大和朝廷の時代に出て来る、熊襲の祖先ではないかという説がある。しかし、真相は歴史の闇の中である。

「うおおおっ！」

卑弥弓呼の魔神霊は、雄叫びを上げた。彼の右手には、巨大な槍が握られていた。

「さア、卑弥弓呼よ、汝が仇敵の神殿を焼き尽くせ！」

と雅が命ずると、卑弥弓呼の魔神霊は槍を振り上げて、宇佐神宮の二之御殿（比売大神が祀られている場所）に投げ下ろした。

「ああっ！」

藍は仰天した。槍は空を切り裂くような音と共に、二之御殿に向かった。卑弥弓呼が叫ぶ。

「うおおおおっ！」

二之御殿に槍が突き刺さった。するとそれと同時に、二之御殿の屋根に黒い炎が走った。

「あれは、黄泉の黒火・・・」

藍は蒼ざめた。雅はニヤリとして、

「そうだ。黄泉の黒火はこの世にならざるもの。この世の水では、あの炎を消すことはできない」

「・・・」

藍は齒ざしりして雅を睨んだ。

やがて黒い炎は、二之御殿ばかりでなく、一之御殿と三之御殿にも燃え移った。神宮の人達が必死に消火活動をしているが、全く火の勢力は弱まらなかった。いや、返って強まっていたかも知れない。

「・・・」

藍は意を決して剣を地面に突き立て、柏手を打った。雅は笑うのをやめて藍を睨んだ。

「ひとふたみよ　いつむななやこのたり　ふるえ　ふるえ　ゆらゆらと　ふるえ」

藍がそう呟くと、彼女の身体が金色に輝き出した。雅はビクンとして藍を見た。田辺や佐藤は気を失った祐子を抱き起こしながら、藍の姿を見ていた。

「小野先生って一体・・・？」

藍は再び柏手を打ち、

おおわたつみのがみ

「大綿津見神よ、黄泉の炎を消し去りたまえ！」

と叫んだ。すると、龜山の脇にある菱形池の水が渦を巻いて空高く

舞い上がり、滝のように宇佐神宮の上宮に降り注いだ。

「何イ!?」

雅は焦っていた。

（ 藍の力を見誤っていた。これほどの術を使えるとは・・・ ）

「うわア、水が押し寄せて来るウツ!」

田辺と佐藤は祐子を引き起こして逃げようとした。しかし、水は黄泉の黒火を消すと、スーッと消滅してしまった。

「ど、どういうことだ?」

佐藤は眼鏡をクイツと上げて呟いた。

「この世ならざるものは、この世ならざるものを使って制する」

と藍は雅を睨んで言った。雅はフツと笑い、

「それでこそ戦いがいがある!」

「何?」

藍はサツと剣を引き抜き、下段に構えた。雅は卑弥弓呼を見上げ、

「この女を殺せ!」

と命じた。藍はその言葉に計り知れないショックを受けた。

（ 殺せ? ）

「ぐおおおおっ!」

卑弥弓呼の魔神霊は、雄叫びと共に藍に襲いかかった。

「先生、危ない!」

と田辺と佐藤が声を揃えて叫んだ。藍はキツと卑弥弓呼の魔神霊を睨み据えて、

「お前ごとき黄泉の化け物に破れる姫巫女流ではない!」

と言い放つと、地面から剣を抜き、バツと上段に構えた。

「うおおおおっ!」

卑弥弓呼の魔神霊は再び槍を出し、藍に向かって投げつけた。

「はアツ!」

藍は気合いと共に剣を振り下ろした。槍はその衝撃波で碎け散り、卑弥弓呼も真つ二つに裂かれた。

「ぐわわわわっ!」



二つに裂けたのは卑弥弓呼と黄泉の魔物だった。卑弥弓呼は穏やかな顔になり、黄泉の魔物は卑弥弓呼の放つ光によって消滅した。

「……」

雅は啞然としていた。

（これが姫巫女流か……。源斎様が恐れるはずだ……）

藍は卑弥弓呼を見上げて、

「さア、お帰りなさい、天へ」

と諭した。卑弥弓呼はニツコリとして天に消えて行った。藍はそれを見届けてから雅を睨み、

「今度は貴方の番よ、雅」

すると雅はニヤリとした。そして大声で笑い出した。藍はムツとして、

「何がおかしいの？」

「俺がここへ来た理由の一つは女王の力を手に入れることだ。そしてもう一つの理由は……」

雅はそこで意味ありげに沈黙した。佐藤と田辺は生唾を呑み込んだ。

「何？」

藍は苛立つて怒鳴った。雅はフツと笑って、

「お前をここに引きつけておき、夜須川の守りをさせないためだ」

「……！」

藍はハツとした。そしてようやく、

「じゃあ、貴方は囷？」

「そのとおりだ。俺は囷だ。お前を夜須川ではなく、宇佐に来させるためのな」

「ということは……」

藍の額を汗が流れ落ちた。雅は不敵に笑って、

「そうだ。今頃夜須川には、源斎様が行っておられる。そして、鬼を封じた結界を破っておられる頃だ」

「……………」

藍はギリツと齒ぎしりしし、何かを唱えようと柏手を打った。すると雅は、

「そうはせん。お前を夜須川には行かせんぞ。ここで始末をつける」

と黄泉剣を藍に向けた。

一方剣志郎達は、昼食をすませて、小石原川（夜須川）の方に向かって歩いていった。

「思っていたより、大きな川ですね、夜須川って」

前方に見える川を見下ろして、由加が言った。剣志郎は頷いて、「そうだな。ホントにこの川が、神話に出て来る天の安河だったんじゃないかって気がするよ」

と言った。すると調子に乗った奥野が、

「そうでしょう？ このあたりを中心にして、周囲にある地名が、読み方や位置がほぼそのままに奈良の地に当てはまるんですよ。とつても不思議なところなんです」

「なるほどな」

と剣志郎はさも感心したように頷いてみせた。波子がウツトリして「ロマンよねエ．．．。1700年前、ここが倭国の都だったかも知れないって考えると」

と誰にともなく言った。

「あれっ？」

最初にその異変に気づいたのは、奥野だった。

「どうした？」

剣志郎は奥野が見ている方向に目を向けた。彼が見ていたのは、小石原川の中州の上だった。

「むっ？」

剣志郎は中州の上に人がいるのに気づいた。白い着物姿の老人のようであったが、その老人は宙に浮いていた。

「何だ、あれは？」

剣志郎は不思議に思つて走り出した。奥野達も剣志郎を追つて川に近づいた。

中州の上に浮かんでいる老人とは、言うまでもなく源斎であつた。彼は小石原川を見下ろしてニヤリとし、

「ここだ。ここに鬼と、そして女王の宮殿が封じられているのだ」と呟いた。

## 第七章 女王降臨

藍は雅を睨み据えたままだった。雅も藍を睨み返していた。

「藍、行くのは構わんが、そいつらの命、どうなっても知らんぞ」と雅が言くと、藍はビクツとして佐藤達に目を転じた。

（雅を振り切って夜須川に行くことはできる。でもそんなことをしたら、武光先生や水野さん達が……）

藍は再び雅を睨んだ。雅はニヤリとした。

（さア、藍。お前がこの窮地を切り抜けて夜須川に向かう方法はただ一つだ。早く気づけ）

源斎はスーッと中州に降り立つと、柏手を打った。

「ふるえ ふるえ ゆらゆらと ふるえ」

彼は呪文を唱え始めた。すると彼の周囲にゴルフボール大の黒い玉が現れ、彼の周りを回り始めた。

「何してるの、あのお爺さん？」

と由加が呟いた。剣志郎はその時、藍に言われたことを思い出した。『夜須川に封じられている鬼を甦らそうとしている男がいるんだ。それで、そいつが封印を破るのを阻止するために行くんだ』

（そうか。あのジイさんが藍が言っていた小野源斎。幕末から生き続けている、化け物のような男、か）

「封印は解けるぞ。1700年の歳月が、結界を緩めた。そして、周りの地形の著しい変化も、それを助長している！」

源斎は狂喜して叫んだ。

「な、何だ、あれ？」

と奥野が指差した。剣志郎達もそれに気づいていた。

「空間が裂けている……。そういつのって……」

と由加は言葉を失ってしまった。剣志郎も、波子も、声を出せなかった。

「フハハハハハ！」

源齋は大声で笑い始めた。裂けた空間の向こうには、古代日本のムラの風景が見えていた。

「あれは弥生後期の風景か？ いや、邪馬台国時代と言った方が正しいか・・・」

とようやく剣志郎は声に出して言った。

（何が始まるうとしているんだ？ あれは一体何だ？）

剣志郎の額に幾筋もの汗が流れた。

藍は意を決して地面に剣を突き立てた。

（一度もやってみたことがないけど、この場から一刻も早く源齋のところに行くには、それしかない）

雅は笑うのをやめて身構えた。

（来るか？ 姫巫女流の秘奥義・・・）

藍は柏手を四回打った。

「柏手を四回？ そんなの、あるのかよ？」

と田辺が言った。すると佐藤が、

「あ、あるよ。宇佐神宮と出雲大社では、柏手は最初四回打つんだよ」

と答えた。田辺は何でそんなこと知ってるんだという目で佐藤を見てから、

「小野先生って一体何者なんだ？」

「そんなこと、わからないよ」

と佐藤は藍を見たままムツとして言った。

「姫巫女流秘奥義、姫巫女合わせ身！」

と藍が叫ぶと、天から一条の強い光が射し、彼女を白く照らし出した。田辺と佐藤は啞然としていた。

「これが、姫巫女合わせ身か・・・」

雅は額の汗を拭って呟いた。

やがて天から、巫女姿の女性が舞い降りて来た。それはまさしく、

倭国の女王卑弥呼であつた。

「あれが、女王卑弥呼か……」

雅は眩しそうに上空を見上げ、舞い降りて来る卑弥呼に目を向けた。

（何とか成功したわ）

藍はホツとした。卑弥呼は藍にスーッと溶け込むように同化した。その途端、藍の身体が強く輝き始めた。

「雅、ここで長々と貴方に関わっている時間はないわ」

藍はそう言うのと右手を田辺と佐藤と祐子、そして左手を麻弥に向け、

「船戸の神よ、黄泉の汚れに染まりし者を押し止めよ」

と言った。すると田辺達の周りに光の結界が現れ、田辺達三人と麻弥は、それぞれその中で護られるように固まった。

「結界か。考えたな。あれは黄泉路古神道では破れない」

と雅が言うと、藍は、

「これで貴方はあの子達に手出しできない。私は源斎のところに行く」

「今から行っても手遅れだと思うがな」

雅はニヤリとして言った。藍はキツとして、

「そんなこと、行ってみなければわからない！」

と言い放つと、柏手を二回打ち、

「高天原に神留ります、天の鳥船神に申したまわく！」  
たかまがはら かんづま あま とりふねのかみ

と叫んだ。すると藍の身体がフワツと浮いた。

「源斎、お前の思い通りにはさせない！」

藍はそう言うのと、凄まじい速さで、光と共に空の彼方に消えた。田辺と佐藤は顔を見合わせた。

「俺達、夢を見てるのかな？」

「それにしちゃ、生々し過ぎるよ」

二人は同時にフーッと長い溜息を吐いた。

「さてと。俺も行くか。源斎様の下へ」

と雅は言つと、スーッと消えた。

藍は夜須川に向かいながら、15年前のことを思い出していた。

15年前。

まだ藍が10歳の時であった。彼女は友達三人と、家の裏にある注連縄の張つてある井戸の周りで遊んでいた。その井戸はひどく古めかしい井戸で、上には蓋がされており、石が載せられていた。藍は仁斎に、決して井戸に近づいてはいけなときつく言われていた。ところがその日は、藍の両親は北海道まで所用で出かけており、仁斎も宮司達の寄り合いで出かけていて留守であった。

元々好奇心旺盛な藍であったから、仁斎と両親がいない今日は、絶好のチャンスだと考え、井戸に近づいてみることにした。これに興味をそそられた友達三人が、藍の家にやって来たのである。

「何か、すつごく古い井戸だね」

三人のうち、おカッパの子が言った。藍は大きく頷いて、

「そりやそうよ。私の家のご先祖様がまだ京都にいた頃からあるの。それを明治時代になって東京に引っ越したのと一緒に、ここに移したんですって」

「へえ。藍の家って、いつから神社やつてるの？」

もう一人の小柄な三つ編みの子が尋ねた。藍はその子を見て、  
「平安時代からよ。1000年くらい続いているの」

「ハイアンジダイ？ それって、昭和より昔？」

とさらに別の一人の、ちよつと太めの子が口を挟んだ。するとおカッパの子が呆れ顔で、

「バカねえ。当たり前でしょ。1000年も続いているのよ」

「そっか」

太めの子はヘラヘラ笑って頭を掻いた。

「入るわよ」

藍は注連縄の下をくぐり、井戸に近づいた。三人の友達もこれに

倣って中に入った。

（何これ？ このザワザワした感じ？）

藍は寒くもないのに、身体中鳥肌が立っているのに気づいた。

「この蓋、重いのかな？」

太めの子が井戸の蓋に手をかけた。藍はギョツとして、

「だめ、触っちゃ！」

と叫んだ。太めの子はキョトンとして、

「えっ？」

と藍の方を向いた。その次の瞬間、蓋がバンと勢い良く跳ね上がった。

「キャッ！」

太めの子はその拍子に尻餅をついた。そのすぐ横に蓋が落ち、地面に突き刺さった。

「何？」

藍は井戸の底からこちらに向かって伝わって来る声のようなものに気づいた。

「みんな、井戸から離れて！」

藍は必死の思いで叫んで、三人を注連縄の外に誘導した。

「ぐおおおおっ！」

雄叫びと共に、井戸の中から真っ黒な姿の人とも動物とも思えないものが飛び出して来た。

「やっぱり……」

と藍は呟いた。

（この井戸、本当に黄泉路に通じる井戸なんだわ。あれは黄泉の魔物……）

「ぐぐぐ……」

黄泉の魔物は、藍達に気づいた。藍は恐れずに魔物を睨んだ。他の女の子達は、歯の根も合わないほど震えていた。

（どうする……？ 私、どうすることもできない……）

恐怖は感じなかったが、自分の無力さと興味本位の愚かな行動に



腹が立ち、苛立った。

「待てよ、化け物」

と声がした。それは中学生の雅だった。彼は学生服のボタンを一つずつ外しながら、井戸の結界に近づいた。藍の顔が喜色に輝いた。

「雅ちゃん！」

「藍、早く友達を連れて表へ逃げろ。後は俺が何とかする」  
と雅は制服をバツと脱ぎ捨てて言った。

「うん！」

藍はすぐさま注連縄の外に出て、三人の友達を追い立てるようにして井戸から離れた。

「ぐおーっ！」

獲物に逃げられた魔物は、憎しみの目を雅に向けた。

藍が知っているのはそこまでだった。そこから先、雅と魔物がどうなったのか、そして何故仁斎が雅を小野家から追放したのかは、未だもって知らない。

（しばらくして井戸のところに戻ってみると、そこにはお祖父ちゃんがいただけで、井戸の蓋は元に戻っていて、雅の姿はなかった。何が起こったのか、私は今でも知らないでいる）

藍はそんな思いを振り切るように首を横に振り、甘木を目指した。

剣志郎は小石原川の河川敷に向かって走っていた。由加達がこれに続こうとすると、

「お前達はここで待ってる。危険だ」

と怒鳴った。由加達は剣志郎のあまりの剣幕に一瞬立ちすくんだ。

「な、何よ？ 何であんなに大声出すのよ？」

と由加は不服そうに言った。すると奥野が、

「いや、確かに危険だよ。だってあのジイさん、空中に浮いてたんだぜ。インチキ宗教の教祖のトリック写真とは訳が違うよ」

「そうね。由加、ここで待ってようよ」

と波子は奥野に同意して言った。由加は何となく煮え切らないといったように二人を見て、仕方なさそうに頷いた。

一方雅は、真つ暗な闇の中にいた。

（ 藍．．．．． ）

雅は一体何を考えているのか？ 彼の今後の行動が、全てを決定して行くのである。

源斎は狂喜していたが、剣志郎が近づいて来るのに気づき、振り向いて剣志郎を睨んだ。

「何者だ？ 我が結界に断りなく近づく者は？」

剣志郎は源斎の威圧感のある声にビクツとして立ち止まった。彼は川の中程にある中州に立つ老人を見据えて、

「貴様が源斎か？」

と尋ねた。すると源斎はニヤリとして、

「なるほど。お前が小野宗家の小娘と一緒に九州に来た男か」

「何？」

剣志郎は自分のことを知っている源斎に恐れを感じた。

（ こいつ．．． ）

「ならば死んでもらわねばなるまい」

源斎の右手が剣志郎を指し示した。するとその五本の指の先から、黄泉の化け物が湧いて来て、剣志郎に向かって飛んで来た。

「何だ、あれは？」

剣志郎はギョツとした。その時彼は藍の声を聞いた。

「剣志郎、伏せて！」

剣志郎はその言葉にハツとして河原に伏せた。次の瞬間、閃光が走り、五体の化け物は消滅した。

「雅め、失敗しおったか．．．」

と源斎は呟き、苦々しそうに剣志郎の横に立っている藍を睨みつけた。

「あ、あれエ？ 藍先生だ。いつの間に？」

由加は呆気にとられて言った。奥野と波子は顔を見合わせた。

「さすが姫巫女流。我が術を一瞬にして破るとはな」

源斎の身体が再び宙に浮いた。藍は剣志郎を気遣いながらも源斎を睨んだままで、

「あの封印は破らせはしない。そして源斎、お前を倒す！」

と叫んだ。源斎はニヤリとして、

「お前ごときがこのわしを倒すじゃと？ 笑止な」

「黙れっ！」

藍はスツと十拳の剣を構えると、源斎のいる中州に飛んだ。

「ならば返り討ちにしてくれるわっ！」

源斎の右手に真っ黒な黄泉剣が現れた。

「源斎ッ！」

藍は降下しながら、源斎に剣を振り下ろした。源斎はフツと笑ってこれを黄泉剣で受け止めた。

「くっ！」

藍は源斎の力に押され、弾き飛ばされたように中州を転がった。生えている草や小石で、藍は手や顔に擦り傷を負った。その傷口から血がにじむ様を見て、

「宗家の力、やはりその程度か。とんだ茶番だ」

と源斎は言い放ち、大声で笑った。藍はギリツと歯ぎしりして、源斎を睨んだ。

（あの源斎という男、藍を弾き飛ばしたようだが、一体どうやって？ 剣は受け止めただけで、振り払った訳ではないし・・・）

剣志郎は、源斎の謎の力に恐怖を感じた。

「わしは今、鬼を解き放つところだ。邪魔立っていたすな」

源斎はまるで藍を無視するかのように背を向け、再び宙に開いた結界の穴を広げるため、呪文を唱え始めた。

「ひふみよいむなやこともちろらねしきるゆゑつわぬとそをたはくめかうゑにさりへてのますあせえほれけ」

剣志郎はその不思議な言葉に眉をひそめて、

「あれは確か、石上鎮魂法？」

と呟いた。

「させない！」

藍は頬を伝わる血を拭くと、源斎に向かって飛んだ。

「寄るな！」

源斎の右手から五体の黄泉の化け物が現れ、融合して一体となり、巨大化した。

「そやつは先程のものとはわけが違うぞ」

と源斎は嬉しそうに言った。

「十拳の剣に斬れないものはない！」

藍はグツと剣を振り上げ、向かって来る化け物に振り下ろした。

真つ二つ、にしたはずだった。しかし化け物は二つに分かれはしたが、スーッと元に戻ってしまった。

「こ、これは・・・」

藍は唖然とした。源斎はそれを見届けてから、

「奥津鏡 おきつかがみ 辺津鏡 へつかがみ 八握の剣 やつか 生玉 いくたま 足玉 たるたま 道反玉 ちがえしのたま 死反玉 まかるがえしのたま 蛇比礼 はちのひれ 蜂比礼 はちのひれ 品物比礼 くさぐさのもの ふるえふるえ ゆらゆらと ふるえ」

と呪文を続けた。

藍は焦っていた。

（何故斬れない？ 何故消滅しない？）

さつきから何度も一刀両断にしているのに、そのたびに元に戻ってしまっている。

「藍！ 目で追うな！ 心で感じる！ そうすれば、斬れるはずだ！」

と剣志郎が叫んだ。藍はハッとして顔を上げ、迫り来る化け物を見た。

「心で、感じる・・・」

藍は目を閉じた。仁斎の言葉が思い出された。

『姫巫女流の極意は、見えぬものを見、聞こえぬものを聞くことに

ある。五感に頼らず、第六感を磨くのだ、藍」

（ わかったよ、剣志郎、お祖父ちゃん ）

「はアッ！」

再び剣が化け物を真つ二つに斬り裂いた。藍は次に跳躍した。

「そこだ！」

二つに斬り裂かれた化け物から、ゴルフボール大の黒玉が出て、それが再び化け物の中に戻ろうとしていた。藍はそれを捉えて、剣で黒玉を突き、砕いた。

「ギャーッ！」

化け物は本体を砕かれたため、消滅した。

「むっ？」

源斎はそれに気づき、呪文をやめた。

「おのれ、宗家の小娘め、どうあってもこのわしの邪魔をするつもりか？」

源斎は地面に降り立ち、藍を睨んだ。藍はスッと剣を中段に構えて、

「次はお前だ、源斎」

と言った。すると源斎は高笑いをした。

「何がおかしい！？」

藍が怒鳴ると、源斎は、

「もはや鬼を封じていたものは消失した。鬼の力は我が力となる」

「何？」

藍はギクツとした。源斎の後ろに見えている空中に開いた穴から、どす黒い妖気が吹き出し始めていたのだ。剣志郎もビクツとした。

「何だ、あれは？」

妖気が吹き出しているのは、由加達にも見えた。いや、由加達ばかりでなく、そばを通りかかった人々全員が、その異様な光景を目にしていた。

「さア、来れ、邪馬台国に滅ぼされ、怨みを遺して死んで行った<sup>な</sup>奴国の亡者共よ。我に宿り、我が力となれ！」

と源斎が叫ぶと、黒い妖気は源斎を取り囲み、スーッと源斎の身体に吸い込まれるように入ってしまった。

「しまった！」

藍は舌打ちした。源斎の身体から、凄まじい妖気が発せられ、目が血走り、長い髪が逆立った。

「まずは・・・」

源斎が右手を振ると、剣志郎の身体が宙に浮いた。

「うわっ！」

そのまま剣志郎は河原に叩きつけられた。ゴキッという鈍い音がした。どこかを骨折したようだ。

「ぐふっ！」

剣志郎は口から血を吐いた。周囲の人々はそれを見てざわついていた。

「先生！」

由加が大声で叫んだ。源斎は藍を見て、

「先程いらぬことを言った礼だ」

と言い、満足そうにニヤリとした。藍は手をギュッと握りしめていた。その手は、怒りで震えていた。

「よくも、よくも剣志郎を・・・」

藍は源斎を睨んだ。

「お前は許さない！」

藍の怒りに呼応するかのように、忿怒の形相の卑弥呼の顔が、藍の顔とオーバーラップした。源斎はギョツとした。

（こやつ、女王の力を・・・しかし、それにしても力が弱い）

源斎はフツと笑った。

「つまりは力を使いこなしておらぬということか」

しかし彼の読みは甘かった。藍は強烈な気を放ち、源斎に向かった。

「何！？」

一瞬出遅れた源斎は、藍の突進をかわし損ね、十拳の剣で左肩を

斬られた。

「うおおっ！」

源斎は空に逃れ、黄泉剣を下段に構えた。

（ たった今、女王の力、手に入れたというのか？ 先の攻撃とは  
うって変わって、まるで鬼神の如き勢い・・・ ）

源斎の額に、汗がにじんだ。

「これが姫巫女合わせ身・・・。宗家究極の秘奥義か・・・。」

藍は宙に浮かぶ源斎を睨んで、

「源斎ッ！」

と叫ぶと、飛翔した。源斎は身構えて妖気の放出を強めた。

「その程度で驕るな、小娘！ 邪馬台族に滅ばされた奴国<sup>なこく</sup>王家の怨  
み、その力とくと見よ！」

と源斎が言っていると、飛翔している藍を押し戻すほどの凄まじい妖気が、  
源斎の身体から発せられた。

「はっ！」

藍は周囲にいる人々に害が及ぶのを察し、気を取り直して源斎に  
向かった。

「させない！」

藍は十拳の剣を振り上げ、源斎に接近した。源斎も黄泉剣を中下  
段に構え、藍を睨んだ。

「はアッ！」

「うおおっ！」

二つの剣がぶつかり、辺りを照らし出すような激しい火花が飛び  
散った。

「何と！」

源斎は目を疑った。黄泉剣の刀身にヒビが入り、粉々に砕けてし  
まったのだ。

「ハッ！」

藍の次の一太刀が、源斎の眉間を斬り裂いた。

「ぐわアアッ！」

斬られた傷口から、源斎はどす黒い妖気を噴き出しながら、地面に落下した。

「おのれ。この程度で死ぬものか。わしは・・・死なぬ！」

源斎はスーッと空間に溶けるように消えて行った。

「しまった！」

藍は慌ててそれを止めようとしたが、源斎は完全に姿を消してしまった。



## 第八章 源斎の秘密

源斎は闇の中にいた。

（おのれ、宗家の小娘め．．．．）

彼は雅が姿を現さなかったことに腹を立てていた。

（雅め。どういっつもりか知らぬが、次に顔を合わせたら、殺す）

源斎の表情は、まさしく鬼であった。

藍は地面に降り立つと、すぐさま剣志郎に駆け寄った。その時、卑弥呼が藍から離れ、空に帰って行った。

「剣志郎！」

彼女は剣志郎のそばに膝を着いて、大声で叫んだ。剣志郎は薄笑いをして、

「大丈夫だ。肋骨が折れたみたいだけど、生きてるよ」

藍は由加を見て、

「古田さん、救急車を呼んで！」

「は、はい」

由加は慌ててバッグから携帯電話を取り出した。奥野は河原に降りて来て、藍に近づいた。

「奥野君、剣志郎を仰向けにするの、手伝って」

「は、はい」

普通なら『剣志郎』と言ったことをからかうところだが、今の奥野にそれだけの余裕はなかった。

「後はお願ひね」

と藍は立ち上がった。奥野はびっくりして藍を見上げ、

「先生、どこに行くんですか？」

「宇佐神宮に武光先生達がいるの。合流したら、病院に向かうわ。貴方は古田さん達と一緒に一足先に病院に行っていて」

「でも救急車が来てからじゃないと場所が……」

と奥野が心配顔で言うと、藍はニツコリして、

「大丈夫。わかるわ。じゃ」

と言うと、光に包まれ、飛び去った。奥野は啞然としてそれを見ていたが、剣志郎はフツと笑って見ていた。

（さすが、藍だな。その辺の巫女さんとはわけが違う）

その光景を雅は反対側の岸から見ていた。

（藍、まだまだぞ。源斎の力、まだ半分だ。奴はもう一体の鬼の力を手に入れに行くだろうからな）

雅はスーッと空間に溶けるように消えた。

剣志郎は甘木市内にある総合病院に運ばれ、すぐに手術を受けた。幸い、折れた骨は肺や内臓には達しておらず、大事には至らなかった。手術は夕方の5時頃終わった。

「とにかく、命に関わる怪我じゃなくてよかったわ」

手術室から運ばれて行く剣志郎を見送りながら、藍が言った。麻弥はグツタリとしてソファに座っていたが、

「そうですわね」

と相槌を打った。しかし顔は引きつっていた。彼女は彼女なりに、自分の責任というものを感じているのだ。

「先生、これからどうするんですか？」

と由加が藍に目をやった。藍も由加を見て、

「竜神先生があんなことになってしまったのだから、旅行は中止ね。今夜は予約したホテルに泊まって、明日の朝すぐに東京に帰りなさい」

「帰りなさいって、じゃあ小野先生は帰らないんですか？」

と波子が口を挟んだ。藍は波子を見て頷き、

「私はまだすることがあるの。武光先生にお願いしてあるから、一緒に帰りなさい」

「でも……」

波子と由加は不満そうに口を尖らせた。すると奥野が、

「お前ら、あのジイさんを見ただろう？ 化け物なんだぜ、あいつは。早く帰った方がいいって」

「そうだよ。俺はそのジイさんを見てないけど、もう一人の男が使った術も凄かったんだ。未だに信じられないんだけど」

と田辺が同意した。この二人の意見が一致することなど、滅多にないことである。

「何よ、あんた達。結局は怖いから逃げ帰りたいんじゃないのよ」

と由加が二人を睨むと、田辺はムツとして、

「そうじゃないよ。俺達がいると、小野先生の足手まといになるんだ。俺と佐藤は、それを身を以て知ったんだから」

と反論した。隣で佐藤が大きく頷いた。

「田辺君の判断が正しいわ。貴女達は私と一緒に東京に帰るのよ」

と麻弥が弱々しいながらも、キビキビとした口調で言った。なおも口答えしようとする由加を制して、

「わっかかりました。帰ります」

と祐子が言った。由加はキツとして祐子を見たが、祐子は素知らぬ振りをした。

「とにかく、一旦ホテルへ行きなさい」

と藍は追い立てるように由加達を歩かせた。

「小野先生」

由加達が廊下の向こうに消えた時、麻弥が声をかけた。藍はハッとして振り向いた。麻弥はソファからゆっくりと立ち上がって、

「このたびは大変ご迷惑をおかけしました」

と深々と頭を下げた。藍は面食らったが、

「い、いえ、別に。武光先生は操られていたんですから、仕方ありませんよ」

と宥めた。しかし麻弥は顔を上げて、

「そうかも知れません。でも、私の心のどこかに、小野先生を陥れようという気持ちがあったのではないかという気がするのです。」

それをあの男に利用されて．．．．．」

と言いかけて涙を流して黙ってしまった。藍はニッコリとして麻弥に近づき、

「いいんですよ。武光先生は、剣志、いえ竜神先生と私のことを誤解しているんです。私達、単に高校の同級生で、それだけなんですから」

「．．．．．」

麻弥は涙を拭いながら、藍を見た。藍は続けた。

「そしてあの男のことは、私達小野家の者の問題です。誰のせいでもないのです」

藍の迫力ある眼光に、麻弥は一瞬ビクツとした。

夜になった。

藍の要望で剣志郎は個室に移された。藍は病室の四隅に清めた塩を盛り、結界を張った。

「藍か．．．．．」

と剣志郎が目を覚ました。藍は剣志郎に近づき、

「気がついた？」

と尋ねた。剣志郎は軽く頷いてから、

「何してたんだ？」

と尋ね返した。藍は周囲を見回しながら、

「結界を張っていたんだ。源斎にわからないようにね」

「．．．」

剣志郎はジッと藍を見つめた。藍はそれに気づいて、

「な、何よ？」

「またあのジイさんと戦うのか？」

剣志郎は心配そうに言った。藍は俯いて、

「そうなるでしょうね。源斎はとてつもないことをしようとしているのよ」

「そうか。それで今奴はどうしているんだ？」

藍は再び剣志郎を見て、

「今は恐らく、根ねの堅州国かたすくににいるわね」

「根の堅州国？ それ確か、記紀に出て来る、死の国のことじゃないか？」

「そうよ。まさにその死の国にいるわ。黄泉路古神道というのは、死や老いや病から完全に無縁になれる呪術を使う一派なのよ。もともと姫巫女流の呪術だったのだけど、禁呪として封印されていたものなの」

「死や老いや病と無縁になれる、か。そんなことできたら、そいつはもう人間、いや、生き物じゃないな」

と剣志郎は天井を見つめて言った。藍は大きく頷いて、

「そうよ。人間は老いたり、病気になったり、死んだりするから、人間なんだもの」

と答えた。

源斎は闇の中、すなわち根の堅州国で、じつと傷が癒えるのを待っていた。彼は幕末の頃のことを思い出していた。

時は一気に動乱の時代を迎えようとしている頃。ペリーが浦賀に来て、日米和親条約が締結されてから、10年ほど経った頃である。源斎はまだ15歳の青年であった。

「このままでは日本は滅びる。隣国の清は、あれほどの大国でありながら、南蛮人共の手によって侵略された。ましてやこの日本では尚更……」

源斎の父親である斎明さいめいは、西洋人の手によって日本が滅ぼされると本気で考えている攘夷派の人間だった。この父親の頑なものの考え方が、源斎の将来を決定づけてしまったのだ。

「徳川の世が終わるのは良い。しかし、南蛮人はそれだけでは収まるまい。必ずや、帝にまで害をなすはず」

源斎は斎明の言にただ頷くだけである。

「よいか、源斎。我ら小野家一門は、千年近くの長きに渡り、朝廷を裏で支えて来た一族。今回はまさしく朝廷始まって以来の一大事。必ずや南蛮人を討ち、日本を守るのだ」

斎明の考えが時代の潮流に取り残されていることを、源斎ははっきりと悟っていた。しかし、子は父に絶対服従の時代である。そんなことは決して口に出せなかった。

（父上は自分の無知を知らぬ。世にこれほどの愚かしいことがあるのか……）

源斎はその時、父殺しを思い立ったのである。

斎明は術者としては三流で、小野家の分家の中でも、最下層であった。『朝廷を裏で支えた』ことなどないのだ。力もないのに、弁舌の方が立つため、小野の分家の中では、目立っていた。しかし、所詮はそれだけのことであった。

（このままあの父を生かしておいても、俺はもちろん、日本のためにも、小野の一族のためにもならぬ）

すでにこの頃の源斎は、小野宗家の当主である小野栄斎にも一目置かれるほどの実力の持ち主であった。だから多少自惚れてもいた。実力のある自分が、実力のない父親を殺すことは正当なことだと考えたのである。

「何だ、源斎？ 妙に殺気立っておるが……？ 何かあったのか？」

自分の部屋に声もかけず、音も立てずに忍んで来た源斎を見て、

斎明はいささか驚いていた。

「何もありません。しかし……」

と源斎は意味ありげに言葉を切った。斎明はムツとして、

「何だ？ 申してみよ」

「これから起こります」

「何？ わけのわからんことを申すな。これから何が起こるのじゃ？」

斎明はその時、書をしたためていたのであるが、筆を投げ出し、

立ち上がった。源斎はそんな父親を軽蔑した目で見たまま、スーッと右手の人差し指を斎明に向けた。

「父上が死ぬのでございます」

「何!？」

斎明は何も防御の手立てができなかった。自分の息子であるから、油断したのかも知れない。しかし仮に源斎が自分を殺しに来たのだとすぐに悟ったとしても、実力に差がある二人では、何も変わらなかったであろう。

「うわアッ!」

斎明の身体に、黄泉醜女が何体も取り憑いた。醜女達は斎明の身体を溶かし始めた。

「げ、源斎、貴様、まさか黄泉路古神道を……………」

溶けて行く顔を引きつらせながら、斎明は源斎を睨んだ。源斎は黙ってニヤリとした。

「お、愚か者めエッ!」

斎明はそう叫ぶと、消えてしまった。源斎はカツと目を見開き、

「父上如きに愚か者呼ばわりされる源斎ではない!」

と怒鳴った。

源斎は翌朝、京都にある小野宗家の邸を訪ねた。京の町は、折からの戦乱で荒れていた。しかし、宗家の邸は塀に傷一つついていなかった。源斎は栄斎の力に畏怖の念を感じていたが、今回のことは誇らしく思っていたので、強気だった。

「何用だ?」

源斎は正門の前で栄斎の息子三人に出迎えられた。と言うより、中に入るのを阻まれたと言った方が正しい。

「……………」

源斎は何も言わずに三人を見た。長男徹斎、次男慶斎、三男斎英。いずれも源斎以上の力を持つ術者であった。しかし、源斎はもはや三人を超えたと思っていた。いや、栄斎すら超えたと思っていたかも知れない。

「その目……。人を殺して来た者の目だな」

徹斎がまるで源斎の心を見透かすかのように言った。源斎はニヤリとして徹斎を見ると、

「さすがですね。しかしその先は読めませんかでしょう？」

と言い放った。徹斎はカツと目を見開き、

「読めておる！ 貴様、父上を殺しに来たな！」

と言うと身構えた。慶斎と斎英もバツと身構えた。しかし源斎は全く怯んでいなかった。

「お三方には用はありません。お退き下され」

「ふざけおつて！」

三人それぞれが光の剣を出した。

「貴様、分家の、しかも最下級の者が、宗家三兄弟を相手に勝てると思っているのかアツ！？」

と慶斎が怒鳴った。源斎は慶斎に目を転じ、

「思っておりますよ。我が術はお三方を一瞬にして葬り去れますので……」

「貴様アツ！」

三人は一斉に源斎に斬りかかった。源斎はスーッと漆黒の剣を右手に出し、身構えた。

「何？」

徹斎はこれに気づいて踏み止まったが、慶斎と斎英は構わず源斎に斬りつけた。

「やめろ、お前達！ そいつの持っている剣は……」

と徹斎は叫んだ。だがすでに慶斎と斎英は黒い剣に真っ二つにされていた。

「たわいもない。宗家の方とは、この程度でしたか。これでは1000年の歴史が泣きまするな」

源斎は嘲笑して徹斎を見た。徹斎はキツとして源斎を睨み、

「愚か者め！ 宗家の力、甘く見るな！」

と言うと、右手に別の長剣を出した。源斎はニヤツとして、



「ほオ。それは神剣十拳の剣。宗家の正当継承者のみが用いることのできる剣・・・」

「そこまで知っていながら、まだこの私に刃向かうつもりか？　つくづく愚か者よ」

徹斎は勝利を確信し、フツと笑った。

「しかしその剣にも斬れぬものがあります」

源斎は全く冷静だった。徹斎は眉をひそめて、

「何だと!?」

源斎はバツと黒い剣を振り上げ、

「それこそがこの黄泉剣！　暗黒の魔剣でございます！」

「やはり・・・」

徹斎はギリギリと歯ぎしりして、

「宗家の後継者として、貴様のように邪法に身を委ねた者を生かしておくわけにはいかぬ」

次の瞬間、十拳の剣と黄泉剣がぶつかり合い、火花が飛び散った。なるほど。確かに長兄徹斎様。実力では栄斎様以上と噂されるだけのことはある」

「くっ・・・」

徹斎は源斎の余裕の表情を見て焦っていた。

「おのれ！」

徹斎は源斎から一旦離れ、次の一撃を繰り出すため、動こうとした。しかし足が地面に根を張ってしまったかのように動かなかった。

「そ、そんな・・・」

徹斎の足は溶け始めていた。

「今すぐ楽にして差し上げますよ、徹斎様」

「おおおっ！」

源斎の黄泉剣が、徹斎を一刀両断した。徹斎は黄泉の黒火に焼かれ、消滅してしまった。

「はっ！」

源斎はその時、門の中から迫る凄まじい気を感じ、思わず後ずさ

った。

「そうか。貴様、やはり黄泉路に足を踏み入れたか」

白髪に白く長いひげの老人が姿を現した。源斎は身構えながら老人を見て、

「栄斎様か？」

と尋ねた。老人は大きくゆっくりと頷き、

「いかにも。わしが小野栄斎じゃ。貴様、源斎じゃな？ 斎明はどうした？」

と尋ね返した。源斎はニヤリとして、

「殺しました。我が手で！」

と右手を突き出し、握りしめた。栄斎はカッと目を見開き、

「自分の父親を殺しておきながらその態度、人としてあるまじきものじゃな。その思い上がり、叩き潰してくれるわっ！」

と叫んだ。そのあまりの気迫に、源斎は一瞬ビクツとした。

「ひとふたみよ いつむななやこのたり ふるえふるえ ゆらゆらと ふるえ」

栄斎は呪文を唱え、柏手を二回打った。

「神剣草薙の剣！」

と栄斎が唱えると、右手に十拳の剣よりひとまわり大きい剣が現れた。

「徹斎、慶斎、斎英の礼、させてもらうぞ」

源斎は十拳の剣の他に神剣があることを知らなかった。彼は焦っていた。

（何ということだ。まずい。黄泉剣以上の力を感じるぞ、あの剣・・・）

「覚悟せい、源斎！」

栄斎は剣を上段に構え、源斎に近づいた。

（くつ。足が動かん。何という、壮絶な気なのだ・・・。こ、この俺が動けぬ・・・）

『源斎よ、うぬに力を貸そう』

どこからともなく、不気味な、男とも女ともわからない声が聞こえた。源斎はハツとして、

（今の声は何だ？）

と周囲を見回した。

「どこを見ている！？」

栄斎の剣が源斎を斬り裂いた。

「うおおおっ！」

源斎はそこで何もわからなくなった。

## 第九章　もう一人の女王

藍は剣志郎に源斎と栄斎の戦いの話をしていた。

「じゃあその時、源斎は死んだのか？」

剣志郎は天井を見ていた目を藍に向けて尋ねた。藍は丸椅子に腰を下ろして、

「死ななかつたわ。いえ、正確に言うと、源斎の肉体は死んだわ。でも、魂は源斎の身体を離れて、栄斎様の身体を乗っ取ったのよ」  
「何だつて？　じゃあ俺達が見たあの老人は・・・」

剣志郎はすっかり動転していた。自分の想像を遥かに超えたことが起こったのに気づいて。

「そう。あれは栄斎様の身体なの。しかも栄斎様の魂は封じ込められ、その力だけを源斎は利用しているのよ」

藍はひどく悲しそうに言った。剣志郎は再び天井を見つめて、  
「そんなことが・・・。そんなことが、人間にできることなのかよ。俺には信じられない・・・」

「もちろん、人間にできることじゃないわ。源斎にそんなことをさせたのは、人間を超えてしまった化け物なのよ」

「化け物？　人間を超えてしまった？　一体どういうことなんだ？」

剣志郎はまた藍に目をやった。藍は沈痛そうな顔で目を伏せ、

「姫巫女流の歴史の中で最大の汚点。まだ、宗派として確立する前のことなのだけど、その時に姫巫女流を修得した者がいたの。それが、その化け物よ」

「最大の汚点？　姫巫女流を修得した？　じゃ、その化け物は、姫巫女流の？」

藍は剣志郎の問いかけに目を上げて頷いた。そして、

「その化け物こそ、黄泉路古神道の開祖にして、日本の歴史上最大の呪術者」

「呪術者？　誰なんだ、そいつは？」

剣志郎は緊張のあまり、シーツをギュツと握りしめた。藍は大きく溜息を吐いてから、

「そいつの名は．．．．．たけしうちのすくね建内宿禰<sup>おおもみ</sup>。400年近く生きたと言われている、日本で最初に大臣になつた男よ」と吐き捨てるように言った。

「建内宿禰？ あの、記紀に出て来る？」

剣志郎も建内宿禰の名前くらいは知っていたが、事蹟までは知らなかった。

「そうよ。建内宿禰こそが、仲哀天皇暗殺の黒幕。そして奴は今でも生きているのよ」

藍の衝撃的とも言える発言に、剣志郎はすっかり驚いていた。藍は剣志郎の驚いた様子を見て、

「生きていると言つても、この世にいるわけじゃないわ。奴もまた、根の堅州国にいるの」

「じゃあ源斎は、黄泉路古神道を使って、建内宿禰に会いに行ったのか？」

「そうじゃないわ。建内宿禰は根の堅州国にいるとは言つても、どこにいるのかは源斎にもわからなかったはずよ。恐らく、建内宿禰の方が、源斎に近づいたんでしょうね」

藍は立ち上がった。剣志郎はピクンとして、

「行くのか？」

と不安そうに尋ねた。藍は微笑んで、

「ええ」

「気をつけるよ」

「ありがとう」

藍は病室を出た。

（ 剣志郎．．． もう会えないかも知れないね．．． ）

心なしか、彼女の瞳は潤んでいた。

「そんな状態で、奴と戦うつもりか、藍？」

藍が廊下を歩いていると、いきなりどこからともなく声がした。

藍はビクツとして周囲を見た。

「その声は・・・」

彼女は身構えて言った。すると突然、目の前に雅が現れた。

「み、雅！」

藍は仰天して一步退いた。雅はフツと笑って、

「感傷的になつていては、奴には勝てないぞ」

「何しに来たの？」

藍は鋭い眼で雅を睨みつけた。雅は真顔になり、

「源斎はもう一体の鬼を手に入れるつもりだ」

「えっ？」

藍は身構えるのをやめて、キョトンとした。雅は藍に近づき、

「姫巫女流の滅失こそ、源斎の悲願だ。奴の姫巫女流に対する怨みは、並みのものではないからな」

と言った。藍は不審そうな目つきで雅を見て、

「何故そんなことを私に話すの？」

と尋ねた。雅はニヤリとして、

「何故かな」

と独り言のように言った。藍はキツとした。

「何よ、私をからかっているの!？」

「病院の廊下で大声を出すな、藍」

と雅に言われ、藍は赤面した。雅は再び真顔になり、

「奴は俺の両親を黄泉路古神道に引きずり込んで殺した張本人だ」

「えっ？」

藍は驚愕した。

（ 雅の両親は宗家に仇なすために黄泉路古神道を修得したとお祖父ちゃんに聞いていた。違うの、それは？）

雅は廊下の窓の外に目をやり、

「俺の両親は、源斎が50年前、仁斎のジイさんとお前の父親である斎に倒されたという話を疑っていた。奴は死んでいないのではなくかと考えていた。そして、黄泉路古神道についていろいろ調べ始

めた」

「・・・」

藍は息を呑んだ。

（お祖父ちゃんはそのを勘違いして・・・）

「しかし両親共、源斎に逆に利用され、その拳げ句に奴に殺され、力を奪われた」

「ええっ!？」

雅は藍を見た。

「奴が栄斎の身体を乗っ取ったのは知っているな？」

「え、ええ・・・」

藍はコクンと頷いた。雅は再び窓の外に目をやり、

「奴はそれだけでは飽き足らず、次々に姫巫女流の分家の者達を襲い、その力を吸収して殺した。もはや源斎は人間ではない。化け物だ」

「そ、それじゃあ、姫巫女流の奥義を尽くしても、勝ち目はないの？」

藍は探るような目で雅を見て尋ねた。雅は空を仰ぎ見て、

「それはわからない・・・。しかし、可能性が一つだけある」

「可能性？」

藍はすっかり警戒心を解いて雅に近づいた。雅は藍に目を向け、

「栄斎には、三人の息子の他に娘がいた。おのかえで小野楓。彼女は三人の兄より力があつたが、女故に継承者となれなかった」

「ええ。それは知ってる。ただ一人、源斎が勝てずに逃げた相手ね」

藍は雅を見上げて答えた。雅は軽く頷き、

「可能性とはそれだ。楓は一族の中で初めて、姫巫女合わせ身を修得した」

「つまり、姫巫女合わせ身には、源斎に勝てる力があるということ？」

と藍が言くと、雅は、

「そうだ。しかし、その当時と今とでは、源斎の力は全然違う。お

前が小石原川で源斎と戦った時、奴は力の半分も出していなかったはずだ」

「じゃあやつぱりだめなの？」

藍は雅にすぎるようににじり寄った。雅は藍の肩にそつと手を置き、

「しかし、姫巫女流にはさらにその上の秘奥義がある」

「えっ？」

藍はキョトンとした。そして同時に雅の手が自分の肩の上にあるのに気づき、赤面した。

「な、何、それ？」

彼女はドキドキしながら尋ねた。雅は藍から手を放して、

「答えは伊勢神宮にある。もう一人の女王が眠っている、な」

「もう一人の女王？」

最初は訳が分からなかった藍も、ハツとして雅を見た。雅はフツと笑って頷き、

「倭の女王は一人ではないということだ」

「うん・・・」

藍は大きく頷いた。すると雅は藍に背を向け、

「そこまでわかっていれば、勝てるはずだ。奴はもう一体の鬼を手に入れに行くだろう。できればその前に決着をつけろ」

「ええ・・・」

藍は目を潤ませて答えた。雅はチラツと藍を見て、

「もし奴がもう一体の鬼の力を手に入れてしまった後だと、二人の女王の力を借りても、勝てる見込みは薄くなる」

「わかったわ」

雅はスーッと消えながら、

「奴の行く先はわかるな？」

「ええ、わかる」

「そうか。俺も力を貸せばいいのだが、お前にすら勝てない俺では、何もしてやれん」



「雅・・・ちゃん・・・」

雅はフツと笑って、

「じゃあな」

と消えてしまった。藍はそつと涙を拭い、歩き出した。

（今は一刻も早く伊勢神宮に行こう）

「ムツ？」

闇の中で傷を癒していた源斎は、藍の動きに気づいた。

「小娘め、伊勢に向かったな。しかしもう遅い。あともう一体の鬼の力を手に入れば、わしに敵はいなくなる」

と源斎はニヤリとして呟いた。

夜更け過ぎ。

誰もいない伊勢神宮の鳥居の前に、藍は立っていた。

日本書紀によれば、倭姫命は、天照大神を鎮座するところを求めて、大和の国を始め、伊賀、近江、美濃の諸国を巡った。そして最後に伊勢の国に入った時、天照大神が倭姫命に、

『この神の風の吹く伊勢の国は、常世の国から波が幾重にも寄せて来る国だ。大和に近い美しい国だ。この国にいたい』

と言った。そして、天照大神の教えに従い、その祠を伊勢の国に建てた。これが天照大神が初めて天から下ったところである。そこに建てられた斎宮を「磯の宮」と言った。

実際にこの宮が本格的な神の宮殿、神宮と呼ばれるようになったのは、天武持統の時代になってからである。すなわち、日本書紀の編纂が始まった頃、同時に伊勢神宮の歴史も始まったのだ。

「もう一人の女王・・・」

藍は鳥居をくぐり、本殿に向かった。

翌朝になった。

由加達はホテルから剣志郎の入院している病院に来ていた。

「武光先生、申し訳ありません。私はあと一週間ほど入院することになりそうなので、生徒達のこと、よろしく願います」

と剣志郎が半身を起こしながら言うと、麻弥はニツコリして、  
「わかりました、竜神先生」

と答えた。すると由加が、

「ねえ、先生、あの塩の山は何？」

と部屋の隅を指差した。剣志郎もそちらを見て、

「ああ、あれはタベ小野先生が作った結界だよ」

「タベ？ まさか小野先生、一晩中ここにいたんですか？」

と波子が口を挟んだ。麻弥は思わずビクツとした。剣志郎は赤面して、

「バカなこと言うなよ。小野先生はすぐに帰ったよ」

「藍先生、どこに行ったんですか？」

と由加が尋ねた。剣志郎は肩を竦めて、

「さア。どこに行っただのかは知らないよ。でもまたあのジイさんと戦うつもりらしい」

「そ、そうですか……」

由加と波子は、間近で源斎の凄まじさを見ているため、身震いした。奥野も驚愕して剣志郎を見ていた。

「大丈夫なんでしょうか、小野先生？」

麻弥が独り言のように言った。剣志郎は微笑んで、

「大丈夫でしょう。あいつは殺したって死ぬような女じゃありませんよ」

と答えた。すると麻弥は寂しそうに笑って、

「竜神先生と小野先生って、本当に理解し合っている仲なんですね」と言った。剣志郎はハツとして、

「あ、いや、その……。あいつとは高校の時から腐れ縁ですから……」

と言いつつにもならないことを言った。するとすかさず祐子と由加が、  
「やっぱりねエ……」

と意味ありげな物言いであげた。

源齋はスーツと現世に現れた。彼の目の前には古びた鳥居があった。その左脇には、「出雲大社」と彫られた大きな石塔が建っていた。彼はその鳥居の奥に目を向け、

「ここにもう一体の鬼が封印されている。その鬼の力を手に入れてから、二人の女王の力を吸収すれば、あのお方の目指されている無敵の魔神が生まれる……」

と呟くとニヤリとし、まるで宙を滑走するかのように奥へと移動して行った。

「小娘、早く現れよ。今のわしでも貴様程度には勝てる」

源齋は自信に満ちた目で言った。

その出雲大社は、本来は「杵築大社」きづきのおおやしなと呼ばれた、世界最大の大

社造りの神社である。古代には本殿の高さが約100mあったと言われており、最近の調査で、実際に巨大な神殿があったことがわかって来ている。祭神は言うまでもなく、大国主神、すなわち、大国様である。境内には数多くの小さな社があり、たくさんの神が祀られている。10月のことを「神無月」と言うが、ここ出雲では、「神在月」と呼ばれる。10月に、日本中の神様がここに集まるからである。

その境内は観光客でこった返していた。デジカメで記念撮影をする者、ビデオカメラで撮影する者、拝殿で願い事をしている者。様々だった。そこへ源齋がフツと現れた。観光客達は源齋の異様な風体に一瞬びっくりして動きを止めたが、やがて神社の関係者とも思ったのか、気にもかけずに思い思いのことを始めた。

「愚かなり、日の本の民よ。うぬらにもはや未来はない。復活する魔神の贄になるのだ」

と源齋は呟き、拝殿の前まで進むと、柏手を四回打った。その音の大きさに、周囲の人はギョツとして源齋を見た。

「ふるえふるえ ゆらゆらと ふるえ 黄泉国に神留ります黄泉津よもつおおかみ

大神に申したまわく」

源齋がそう唱えると、地鳴りがし始め、大社の拝殿が揺れ始めた。  
「何だ？ どうした？」

「地震か？」

周りの観光客達は散り散りになって逃げた。源齋はさらに柏手を  
二回打ち、

「黄泉津大神出ませいっ！」

と大声で叫んだ。その途端、天が猛烈な勢いで黒雲に覆われ、雷鳴  
が轟き、稲妻が走った。

「きゃーっ！」

「いやアッ！」

観光客達はますます慌てふためき、逃げ惑った。源齋は高笑いを  
して、

「フハハハハ！ これでわしは無類無敵の力を手に入れることができ  
る！ そしてあの小娘が来れば・・・」

その瞬間、稲妻が拝殿に落ち、そこにある長さ13m、胴回り9  
mの、巨大な注連縄が真ん中から二つに裂け、スズーンと地面に落  
ちた。

「来た！」

源齋はカツと目を見開いた。地鳴りはますます激しくなり、雷鳴  
は轟音となり、稲妻は大社の様々な場所に落ち、本殿に火を放って  
行った。その直後、拝殿の前の石畳が碎け散り、地割れが走った。  
そしてその地割れの底から、どす黒い妖気が、まるで水蒸気のように  
に噴き出した。

「フフフ・・・。邪馬台国との抗争に敗れ、九州を脱出した狗奴国<sup>くなく</sup>  
の末裔が流れ着き、呪術を伝承して栄えた出雲王国。しかしそれも  
邪馬台国を近畿に移動させた二代目の女王が礎を築いた大和朝廷に  
より滅ぼされた・・・」

源齋はニヤリとした。

「そうだ。言わば、この地に封じられし怨霊達は、邪馬台族に対し

て二重の怨みを抱く者達よ。だからこそ、その怨念は、あの方の復活に役立つというもの・・・」

源斎は全身でどす黒い妖気を吸収していた。

「そうじゃ！ もう少しじゃ！ あと一息で、魔神が甦り、この世は黄泉の国となり、我が世となる」

と源斎は言つと、大声で笑った。するとその時、

「させるかアッ！」

と声がし、源斎に光の玉がぶち当たった。

「うごあつ！」

源斎は不意を突かれ、この光の玉をまともに喰らい、吹き飛ばされて拝殿の柱に叩きつけられた。柱はミシツと音を立ててヒビが入った。

「お、おのれ・・・」

源斎は口から滴る血を右手で拭くと、光の玉が飛んで来た方を睨んだ。そこには、以前にも増して強く光り輝く藍が、十拳の剣を構えて立っていた。

「小娘め・・・」

源斎は藍を睨んだまま、ゆっくりと立ち上がった。藍は剣をスツと下段に構え、

「源斎、今度こそ決着をつける！ 私は二人の女王の力を借りている！」

と叫んだ。藍の後ろに、倭国初代女王卑弥呼と、その後継者の二代目女王の台与とよの姿が見えた。源斎はしかし、

「その程度の力で、このわしに勝てると思っているのかアッ！」

と気を放った。すると激しい妖気が辺り一帯に噴出し、付近の死霊を呼び寄せた。

「我が力は怨念。怨念を吸収すれば、わしは無限に強くなって行く。貴様など、足下にも及ばぬわ」

源斎は目を血走らせて言い放った。藍はキツと源斎を睨み、  
「姫巫女二人合わせ身に敵はない！」

と言つと、源斎に向かつて走り出した。そして、

「神剣、草薙の剣！」

と左手に別の剣を出し、二刀流の構えをとった。源斎はギョツとし、あることを思い出した。

（ あ、あれはまさしく楓！ ）

## 第十章 古代の魔神

源斎はまた昔のことを思い出していた。

（こ、これまでか・・・）

源斎は栄斎に草薙の剣で斬られた。その時であった。

（どこだ、ここは？）

源斎の魂は、漆黒の闇の中を漂っていた。彼は辺りを見回した。するとほるか前方に、白い髪を足まで伸ばし、白い髭を胸まで伸ばした、とてつもなく威圧感のある老人が立っていた。衣冠束帯のその老人は、かすかに笑って見えた。

「だ、誰だ？」

源斎は漂う身体を動かしながら尋ねた。老人は、

「我は建内宿禰。おおやまとねこくにくるのみこと大倭根子国玖琉命（孝元天皇）の孫にして、

うぬら小野家が継承する姫巫女流の最高の使い手ぞ」

と答えた。源斎はハツとした。

（建内宿禰だと？ 確か姫巫女流から黄泉路古神道を創始した男だ。一体これはどういうことだ？）

「うぬに力を貸そうと申したはず。よってうぬをここへ導いたのだ。や」

「お、俺を？」

と源斎は眉をひそめた。建内宿禰は源斎に近づき、

「我はその昔、姫巫女流の継承者によってこの根の堅州国に封じられた。うぬの力で、我を解放してほしい」

「どうということだ？」

と源斎は尋ねた。

そこで源斎はハツと我に返った。藍の剣が目前に迫っているのを彼はスツとかわした。

「またしても我が野望を阻む者は女か!？」

源斎は藍を睨みつけた。藍も源斎を睨み返し、

「お前の唯一の敗北。それが栄斎様の真の後継者、楓様! お前は楓様に敗れ、楓様を恐れるあまり、楓様が亡くなるまで、根の堅州国から戻らなかった!」

「・・・」

源斎は齒ざしりした。藍は十拳の剣を下段、草薙の剣を中段に構え、

「楓様が宗家で初めて姫巫女合わせ身を修得したお方だからだ。お前には、姫巫女二人合わせ身を破る術などない!」

「ほざくな、小娘エツ!」

源斎はカッと目を見開いて黄泉剣を取り出した。そしてニヤリとすると、

「その姫巫女合わせ身は、お前が生娘であればこそなせる術よ。今からその術、破ってくれるわッ!」

と言い、指先から次々と黄泉の魔物を放った。源斎はけたたましく笑い、

「その女を辱めよ」

と命じた。藍は途端にザワツとして恐怖を感じた。

( 辱める? )

黄泉の魔物達は藍に迫り、彼女の服を引き裂こうとした。

「くっ!」

藍は神剣を使い、魔物をなぎ払った。

「きゃっ!」

彼女の足を一匹の魔物が払った。藍はバランスを失って倒れた。そこへ何十もの魔物がのしかかり、藍の姿は見えなくなってしまった。

「気がふれるまで辱めよ! 宗家への怨み、たつぷりと晴らしてやる!」

と源斎は狂喜して叫んだ。しかしその魔物達の塊は、次の瞬間光に



碎かれ、散った。

「な、何!?」

源斎は驚いた。藍は無事だった。Ｔシャツが破れ、あちこち出血し、ジーパンも裂け、脚が露になっていたが、彼女自身は少しも疲労している様子はない。もちろん、「辱められた」形跡もなかった。「下衆な考えをする男め……。この程度で私はやられはしない！」

藍は再び強く輝き出した。源斎は眉間に皺を寄せて、

「おのれ……。やはり貴様は、このわしが自分の手で殺してやる。そして、二人の女王の力も、あのお方の復活に捧げ奉る！」

「あのお方とは、建内宿禰か？」

と藍が尋ねると、源斎はニヤリとして、

「そのとおりじゃ」

「何故奴の復活に二人の女王の力があるのだ？」

藍は怒気を込めて言った。源斎は高笑いをして、  
「知れたこと……。あのお方は、姫巫女流も修得されている。だからこそ、黄泉路古神道の力となる二体の鬼と、姫巫女流の力の源である二人の女王の力が必要なのだ」

と答えた。藍は剣を構え直し、

「建内宿禰の復活など、絶対にさせない！」

と言うと、源斎に向かって走り出した。源斎はニヤリとして、

「愚かなり、小娘。我が力、とくと味わうがいい！」

と叫び、黄泉剣を振り上げた。

「源斎イツ！」

藍が剣を交差させて、源斎に突進した。

「うおーっ！」

源斎は雄叫びと共に、黄泉剣を振り下ろした。その先から、どす黒い妖気が噴き出し、藍にぶち当たった。

「きゃあアッ！」

藍は妖気に弾き飛ばされ、柱に叩きつけられた。

「くっ・・・」

彼女は地面にずり落ち、気を失ってしまった。

「フツ。たわいもない。宗家もこれで滅びる。我が1600年の悲願が今、達せられる・・・」

源斎は自分が自分でなくなりかけていることに気づいた。

（何？ わしは一体・・・。1600年だと？ それでは今喋っているのは誰だ？）

源斎は途端に焦り出した。

（そうか。そういうことか。建内宿禰は最初からこのわしを依代としてこの世に甦ろうとしていたのか・・・）

『今更気づいてももう遅いぞ、源斎。うぬは我が糧となるのじゃ』

建内宿禰の声が源斎の頭の中を駆け巡った。源斎は齒ぎしりしたいや、したつもりだったと言った方が正しいだろう。すでに彼の身体（とは言っても元は栄斎の身体だが）は建内宿禰によって支配されていたのだ。

「死ぬがいい、小娘！ そしてうぬも我が糧となれ！」

黄泉剣が振り下ろされ、その剣先が藍に迫った。

「そううまくはいかんど、建内宿禰！」

の声と共に、黄泉剣をはじいた者がいた。それは、藍の手から取った草薙の剣を持った雅であった。

「おのれ。雅め、まして邪魔をするつもりか！？」

建内宿禰がその姿を源斎とダブらせながら言った。雅はニヤリとして、

「お前の邪魔をするのは今回が初めてだ」

と言い返した。源斎の身体を完全に支配した建内宿禰は、キツとした表情になり、

「先にうぬから我が糧としてくれるわッ！」

と妖気を撒き散らした。雅はサツとその妖気から飛び退き、

「藍の光の力には、俺は立ち向かう自信はないが、暗黒の力なら、貴様のような化け物に負けはしないぞ」

と言った。すると建内宿禰はフツと笑って、

「愚か者め。うぬの力など、この小娘の足下にも及ばぬのだぞ。よって我の敵ではない！」

と叫んだ。雅は内心焦っていた。

（俺の黄泉路古神道がどこまで通用するか、全くわからんが、何としても藍が意識を回復するまで、奴を引きつけなければ・・・）  
「死ぬがいい！」

黄泉剣が振り下ろされた。雅はそれを草薙の剣と自分で出した黄泉剣で受け止めたが、黄泉剣は砕け、草薙の剣ごと雅は弾き飛ばされてしまった。

「その程度の黄泉剣などで我の攻撃を防げると思ったか？ 草薙の剣のおかげで、命拾いしたことを喜ぶがいい」

建内宿禰の嘲笑が雅の耳に届くかとどかないかというごく短い時間に、雅は黄泉剣の第二撃を食らっていた。

「ぐはアッ！」

（何だ、今は・・・。まるで見えなかった・・・）

雅は血反吐を吐きながら立ち上がった。

「まだ立つのか、雅？ 命だけは助けてやる。今からでも遅くはない。我に服せ」

「・・・」

雅にも何故立ち上がったのか理由はわからなかった。それは藍への純粋な愛情だったのかも知れないが、雅はそれを決して認めようとしなかった。

（俺には藍を守る義務がある！）

彼はまるでフラッシュバックのように、井戸の脇で藍達を逃がし、黄泉の魔物を倒したことを思い出していた。

（あの井戸の蓋が、藍達の悪戯程度で開くはずがない。あの時すでに源斎は少しずつ宗家に悪意を送り込み、あの井戸の封印を緩めていた。藍達の行動はきっかけに過ぎなかった）

雅は血を拭い、建内宿禰を睨んだ。

（こいつが、いや、こいつの後ろにいて、今この世に甦ろうとしている建内宿禰こそが、俺の両親を殺し、藍の両親を殺し、仁斎のジイさんを瀕死にした張本人。そして様々な災いの源だ）

「まだ刃向かうつもりか？」

建内宿禰が次の一撃を放つ体勢に入った。

（ 防げるか？ ）

雅は死を覚悟した。幼い頃藍と遊んだ日々が鮮明に頭の中に浮かんで来た。

「むうつ！」

しかし建内宿禰の第三撃は阻まれた。藍の振り下ろした十拳の剣によって。

「何！？」

建内宿禰と雅は、ほぼ同時に驚き、叫んだ。

「小娘め、もう気がついたか・・・？」

建内宿禰はそう言いかけて、藍の異変に気づいた。藍は気を失ったままだったのだ。

「どうということだ？」

宿禰が身じろいだ時、藍の後ろに卑弥呼と台与の姿が浮かび上がった。

「ぬウツ！」

建内宿禰は怯え出した。彼は明らかに動揺していた。彼は後ずさりして藍から離れた。

「そうか。姫巫女二人合わせ身の究極の形とは、依代である者が意識を失うことだったのか。完全な依代と化すことによって、二人の女王の力は最大限に発揮される」

と雅は呟いた。そしてフツと笑い、

「生まれつき人と争うことが嫌いな藍の優しさが、二人の女王の力を抑制していたということか」

建内宿禰はまるで固まってしまったかのように動けなくなっていた。藍が、と言うより二人の女王が雅を見た。雅はゆっくり頷き、

草薙の剣を投げた。藍の左手がそれを受け取った。

『建内宿禰よ、今こそ1600年前の決着、つけようぞ』

卑弥呼と台与が言った。建内宿禰は悔しげに下唇を噛み、

「戯れ言を！ 今一息で、我はこの世を統べる者となるのじゃ。邪魔はさせぬ！」

と顔中汗まみれになって反論した。すると卑弥呼が、

『ならば今度こそ消す。神剣合わせ身！』

と言った。

「何！？」

建内宿禰はギョツとした。

（聞いたことのない奥義……。何をするつもりか……。？）

藍の右手には十拳の剣、左手には草薙の剣があったが、その二つの剣を近づけ、合わせたのである。

「何と！」

雅もこれには仰天した。

（こ、これは……。）

十拳の剣と草薙の剣は、キラキラと輝きながら一つになり、一周り大きい剣に変化した。

『天津剣！』

と台与が言った。建内宿禰は度肝を抜かれた。

「な、何じゃ、あの輝きは……」

『斬！』

まさに一瞬の出来事であった。天津剣により、建内宿禰は一刀両断され、そのどす黒い妖気は急速に消失して行った。そしてそれと同時に、そこから今まで源斎の手にかかって殺され、吸収されていた宗家や分家の人々の魂が解き放たれ、天に昇って行った。

「親父、お袋……」

雅は自分の両親が微笑んで天に昇って行くのを見た。彼はそれに微笑み返した。

「ぐおおおおっ！ 我は滅さぬっ！ ここは一度消えるが、またい

つの日か、必ず戻って来る！ 覚悟している！」

と建内宿禰は叫ぶと、爆発したかのよう四散し、消滅した。

『雅よ』

卑弥呼が雅に語りかけた。雅は卑弥呼に目を向け、跪いた。

『これからもこの娘のことを守っておあげなさい』

「はい」

雅は頭を下げて答えた。すると卑弥呼と台与はニッコリして消えて行った。同時に藍がバツタリと倒れ伏した。

「藍！」

雅は藍に駆け寄り、彼女を抱き起こした。

「み、雅ちゃん・・・」

藍は記憶の混濁を起こしていた。自分は15年前にタイムスリップして、雅も15歳の少年に戻っていた。

「しっかりしろ、藍。建内宿禰は消滅したぞ」

と雅は彼女を揺すった。藍はようやく意識がしっかりして来て、パツチリと目を開いた。

「私、一体・・・？」

彼女は強く頭を振り、立ち上がった。雅も立ち上がり、

「お前は建内宿禰に勝ったんだ」

「私が？ でも、何も覚えていない・・・」

藍は考え込むように首を傾げた。雅はフツと笑い、

「まア、いい。とにかく全て終わった。早くお前の生徒達が待つ、甘木へ向かえ」

「うん・・・」

藍は大きく頷いたが、すぐにハツとして、

「雅はどうするの？」

と尋ねた。すると雅は自嘲気味に笑い、

「俺は一度は黄泉路に足を踏み入れた者。たとえどんな理由があるうとも、宗家に戻ることはできない」

「で、でも、お祖父ちゃんにわけを話してさ・・・」

と藍は半ベソ状態で言ったが、雅は首を横に振り、

「だめだ。それはあつてはならぬことだ。あの井戸の事件以来、俺は姫巫女流とは袂を分かつたのだ。もはや戻ることはできない」

「だけど私、貴方のことが・・・」

藍がそこまで言いかけると、雅は人差し指で藍の口を封じた。彼は真剣な目で、

「それ以上言うてはいけない。お前にはあの男がいるではないか」と言った。藍の頭の中に、剣志郎の笑顔が浮かんだ。藍は耳まで赤くなった。雅は再びフツと笑い、スーツと消えて行った。

「雅！」

藍は大声で叫んだ。それが大社中に響き渡り、古代出雲で起こった悲劇のように、消えて行った。

## 第十一章 歴史の真相

病室で剣志郎は眠っていた。個室のため、中は静まり返っていた。  
「剣志郎？」

とそこへ藍が入って来た。剣志郎はハツとして目を開き、藍を見た。  
藍は傷だらけで、どっちが入院した方がいいかわからないほどだった。が、満面の笑みがそんな剣志郎の心配を払拭した。

「勝ったんだな？」

と剣志郎は尋ねてみた。藍は大きく頷いて剣志郎に近づいた。

「術後の経過はどうなの？」

「どうもこうも、まだ一日しか経っていないよ」

「それもそうね」

藍はベッドの脇の椅子に腰掛けた。剣志郎は半身を起こした。

「お前の方こそ、外来で治療してもらえよ」

「うん」

やけに嬉しそうに答える藍に、剣志郎は何故かドキドキした。妙に彼女のことが可愛く見えたのだ。

（俺、こんな時に何考えてるんだろう）

そんな剣志郎の思いなどまるで気づいていないのか、藍は、

「何日くらい入院するの？」

と尋ねた。剣志郎は藍の様子にがっかりしたが、

「五日間くらいかな？ 経過次第では、もっと早く退院できるらしいよ」

すると藍はボソッと、

「そんなに長く？」

と言った。剣志郎はますますドキドキした。

（えっ？）

剣志郎は話題を変えようとして、

「そうだ、武光先生が持って来てくれたシュークリームがあるんだ。



食べるか？」

と起き上がって脇にあるワゴンの上の箱を取ろうとした。

「痛っ！」

身体をひねったため、激痛が走った。剣志郎は危うくベッドからずり落ちそうになった。

「危ないっ！」

と藍が咄嗟に支えてくれたので、彼は助かった。

「何やってるのよ。私が取ってあげるわよ」

と剣志郎をベッドに戻した時、今度は藍がよろけて倒れかけた。

「危ない！」

剣志郎は思わず手を差し伸べたが、藍は自力で倒れるのを防いだ。

「あっ！」

しかし、防ぎはしたが、彼女の顔は剣志郎の顔の間近にあった。

お互い、火が出るほど顔が赤くなった。

「藍」

剣志郎は藍の両肩を掴んだ。藍はビクツとしたが、逃げたりはしなかった。彼女は目を瞑った。剣志郎は生唾を呑み込みそうになったが、何とか堪えて、彼女にキスしようと顔を近づけた。その時、  
「おっ早うございまーす！」

と由加達が入って来た。藍と剣志郎は慌てて離れた。

「あーっ、藍先生！ 帰ってたんですか？」

と由加が言った。藍はドギマギしながらも、

「え、ええ。たった今ね」

どやどやと生徒達が入って来た後、麻弥が申し訳なさそうに入ってきた。

「小野先生・・・」

麻弥は由加達が場所を空けてくれたので、前に進み出て、藍に近づいた。そして涙をこぼしながら、

「よく、よくご無事で・・・」

「また、大袈裟ですよ、武光先生。そんな、泣かないで下さい」

藍は困り顔で、麻弥の頬を伝う涙を拭った。麻弥は藍を見つめて、  
「ありがとうございます、小野先生」  
と言った。

「古代日本の歴史は、殺戮と侵略の連続なのよ。天孫降臨も、神武東征も、出雲の国譲りも、全て戦争のこと。そうやって古代日本は少しずつ統一国家になっていったの」

帰りの新幹線の中で、藍は真剣な顔で語っていた。入院のため残る剣志郎と、彼の世話をするために残った麻弥が気になったが、自分まで残るわけにもいかず、後ろ髪を引かれる思いの帰路だったが・・・。

「あの源斎という男は、建内宿禰という怪人に利用されていたのだけれど、人間は自分の欲に溺れるといっしかその欲に支配されるようになってしまっわ。源斎の境遇には同情する部分もあるけれど、あの男の信念はあまりに歪んでいたわ。だから建内宿禰に利用されてしまったのよ」

と藍は窓の外に目をやった。雲間から光が射し、海がキラキラと輝いているのが見えた。

「あのジイさん、何をしようとしていたんですか？」

と田辺が尋ねた。藍は田辺を見て、

「源斎は、邪馬台国に滅ぼされた奴国王家の怨霊と、大和朝廷に滅ぼされた出雲王家の怨霊の力を借りて、邪馬台族（やまとぞく）が築いたこの国を滅ぼそうとしていたのよ」

田辺はびっくりした顔で奥野と顔を見合わせた。佐藤はしきりに眼鏡を上げている。

「でもさ、それがなくなっただから、よかったじゃないの」

と波子が陽気に言った。すると由加が、

「私も聞きたいことがあるんですけど」

「何、古田さん？」

と藍が由加を見て尋ねると、由加はニマァッとして、

「藍先生、竜神先生とキスしてたでしょ？」

「ええっ!？」

祐子や波子、そして田辺達も仰天した。藍はパニックになりかけて、

「な、な、何言ってるのよ、ふ、古田さん! そんなことするわけないじゃないの？」

「じゃあ、私が病室に入って行った時、二人して妙に顔を近くに寄せていたのは何故ですか？」

と由加は意地悪そうに尋ねた。藍は、

（見られてたのか・・・）

と観念しかけたが、

「誤解よ。キスするわけないでしょ、竜神先生なんかと」

と反論した。由加はそれでも、

「そうですか？ 怪しいなア」

と疑いの眼差しを向けた。藍はさらに反論しようと思ったが、ふと考え込んだ。

（本当に終わったのだろうか？ 源斎は今度の事件までの長い間、どこで何をしていたのだろうか？ 小野宗家や分家の人間を殺して吸収してただけだろうか？ 私が源斎ならもう一つすることがある。仲間、あるいは手下を作る……。その可能性は大いにある）

藍は聞いていないが、建内宿禰は言ったはずだ。

「我は滅さぬっ! ここは一度消えるが、またいつの日か、必ず戻って来る! 覚悟している!」

つまり、全てが終わったわけではないのである。

京都。千年以上日本の都があったところである。

「源斎様が敗れるなんて・・・」

暗い部屋の中で、女は呟いた。

「宗家の小娘、私が仕留める。仁斎への復讐も兼ねてね」

と女は言い、甲高い声で笑った。

## 第十一章 歴史の真相（後書き）

### 自作解説

神村 律子

さて。様々な突っ込みはご容赦願いましたと。

とにかく、娯楽作品です。邪馬台国のことや、奴国、出雲、伊勢神宮、宇佐神宮など、非常に盛りだくさんな内容になってしまいました。姫巫女流という宗派、黄泉路古神道という宗派は、私の創作、オリジナルです。どこかで見たことがあるとしたら、全くの偶然であります。

ま、名前は頂いたものが多数あります。古田由加は、古田武彦先生と、藤村由加先生の合わせ技。水野祐子は、水野祐先生に子を付けただけ。江上波子は、「騎馬民族説」の江上波夫先生から。田辺は田辺昭三先生から。奥野正は、奥野正男先生から。武光麻弥は、武光誠先生から。佐藤孝だけは、全然分野の違う某学院の佐藤孝先生（そのままです）から。

小野藍と竜神剣志郎は、私のオリジナルです。小野姓は、物語の中でも書いている通り、平安時代の実在の人物、小野篁からとっています。何故小野篁かということ解説し始めると、膨大な話になってしまいますので、割愛いたします。もともと、小野藍は全く別のお話のサブキャラクターでした。それが主人公として一本立ちしたのは、「カルラ舞う」の影響であります。その元のお話には、剣志郎も出て来ますが、もっとおっちょこちょいです。ハハハ。

物語の終わりに、次の敵のような女が出て来ます。まさしく次の敵です。機会があれば、掲載したいと思います。

ありがとうございました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7280e/>

---

ヒメミコ伝 古代の魔神

2011年11月10日19時54分発行